

天理市埋蔵文化財調査概報

平成10・11・12年度（1998～2000年）

2006

天理市教育委員会

例　　言

I、本書は、天理市教育委員会が平成10・11・12年度に行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

II、平成10年度から平成12年度にかけて行った埋蔵文化財の発掘調査は次のとおりで、遺跡名、調査地、調査期間、担当者名を列記する。

平成10年度

1、柿本庵寺	調査地	柳本町2490番地	調査面積	64m ²
	調査期間	平成10年7月27日～平成10年8月7日	担当者	青木勘時
2、長岳寺旧境内地遺跡	調査地	柳本町577番地	調査面積	800m ²
	調査期間	平成10年9月1日～平成10年12月5日	担当者	青木勘時
3、ハミ塚古墳	調査地	岩屋町(市道)	調査面積	35m ²
	調査期間	平成11年1月11日～平成11年2月2日	担当者	青木勘時
4、天理駅前試掘調査	調査地	川原町802番地他	調査面積	250m ²
	調査期間	平成11年2月8日～平成11年2月23日	担当者	青木勘時

平成11年度

5、矢矧塚古墳	調査地	成願寺町(市道)	調査面積	8m ²
	調査期間	平成11年7月7日～平成11年7月14日	担当者	青木勘時
6、田町遺跡	調査地	田町403-1番地	調査面積	1000m ²
	調査期間	平成11年4月5日～5月31日	担当者	青木勘時
7、田井庄町遺跡	調査地	田井庄町441	調査面積	300m ²
	調査期間	平成11年8月2日～平成11年8月30日	担当者	青木勘時
8、備前環濠遺跡	調査地	備前町251・252番地	調査面積	50m ²
	調査期間	平成12年1月21日～平成12年2月21日	担当者	青木勘時
9、ダンゴ塚古墳(第1次)	調査地	豊田町306	調査面積	1100m ²
	調査期間	平成11年5月24日～平成11年7月31日	担当者	松本洋明

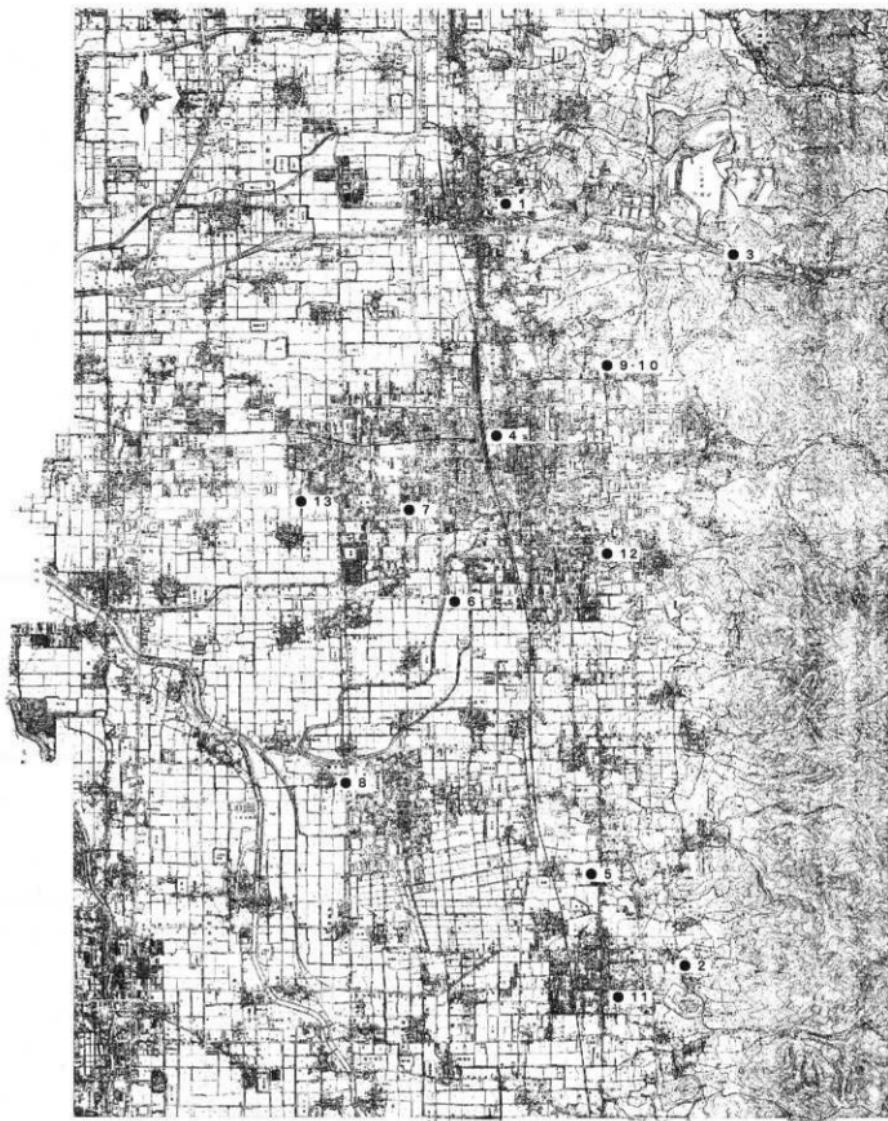
平成12年度

10、ダンゴ塚古墳(第2次)	調査地	豊田町306番地	調査面積	100m ²
	調査期間	平成12年7月24日～平成12年8月22日	担当者	青木勘時
11、柳本藩邸跡(第8次)	調査地	柳本町宮寺1474番地	調査面積	40m ²
	調査期間	平成12年9月25日～平成12年10月2日	担当者	青木勘時
12、西山古墳	調査地	勾田町296	調査面積	35m ²
	調査期間	平成12年12月11日～平成12年12月28日	担当者	松本洋明
13、平等坊岩室遺跡(第20次)	調査地	岩室町42-2	調査面積	27m ²
	調査期間	平成13年3月7日～平成13年3月21日	担当者	松本洋明 青木勘時

III、調査補助員及び遺物整理員は次の方々である。

芳村信芳、中森軍之助、中森富美代、河喜多淑子、松本真並、藤岡早希、八重樫由美子、松本寿子、奥井智子、石井亜希子、杉澤友香里、石田由紀子、金子敬徳、村上真理

IV、本概報の執筆は、調査担当者が分担し、編集は松本がおこなった。



平成10・11・12年度調査地点

目 次

平成10年度（1998）

1. 柿本廃寺	1
2. 長岳寺旧境内地遺跡	3
3. ハミ塚古墳	11
4. 天理駅前試掘調査	15

平成11年度（1999）

5. 矢矧塚古墳	17
6. 田町遺跡	19
7. 田井庄町遺跡	29
8. 備前環濠遺跡	35
9. ダンゴ塚古墳（第1次）	39

平成12年度（2000）

10. ダンゴ塚古墳（第2次）	45
11. 柳本藩邸跡（第8次）	49
12. 西山古墳	52
13. 平等坊・岩室遺跡（第20次）	57

平成10年度
(1998)

1. 柿本廃寺 - 楠本町

I. はじめに

今回の調査は、奈良時代後期の古代寺院である柿本廃寺推定地の調査である。調査地は、現在和爾下神社参道脇の広場となっており、その東北隅に掘削深度が深く及ぶ防火水槽の設置が計画されたことを契機として実施した。

調査は、一辺8mの方形の調査区を防火水槽に伴う掘削範囲を内包するような位置関係に設定して進めることとなった。現地における調査は、平成10年7月27日より開始し、同年8月7日にすべての調査にかかる作業を終了した。総調査面積は64m²であった。

II. 調査の概要

1. 層序

調査地における基本的な層序は以下の通りである。

第1層 近現代整地上① 第3層 近世・近代整地土

第2層 近現代整地土② 第4層 地山（基盤層）

第1・2層および第3層までは、現状の参道脇に接する広場の整地土層であり極めて新しい時期の整備にかかるものであった。

次の第3層では、江戸時代以降の整地土層であるが、これも現状と同様の土地利用にかかる人為的な



図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

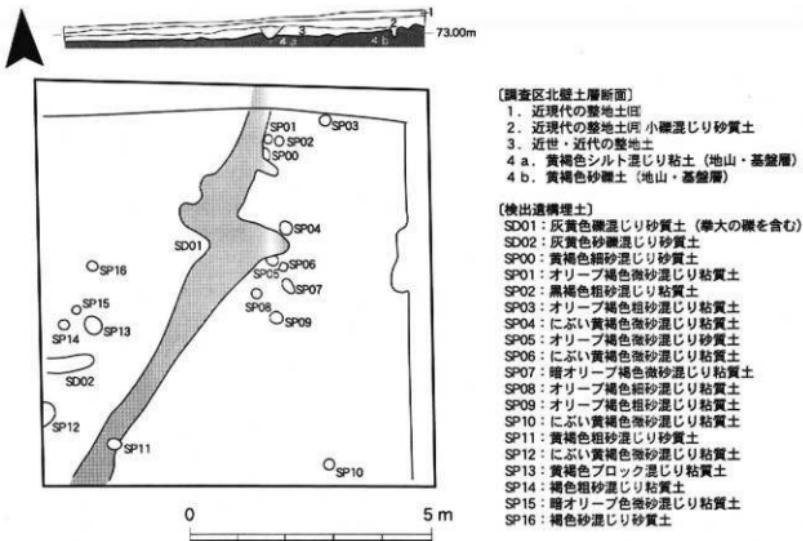


図2 調査区平面・土層図 (S = 1/100)

整地によるものである。今回検出した溝、小穴等の遺構群はすべてこの第3層の上面において検出しておらず、これより時期の遅る遺構の検出は認められなかった。

最後に、第4層は東方の東大寺山丘陵より下方に延びる黄褐色の砂礫、シルトを基調とする基盤層であり、上部の整地によって削平された状況が窺える。

2. 検出遺構と出土遺物

調査では、先述の第3層上面で溝、小穴等の遺構群を検出している。

溝SD01は、調査区を北東～南西方向に斜行する溝である。埋土中には、拳大の礫が充填されており暗渠排水溝としての機能が考えられた。遺物は、埋土の礫に混じって近世陶器片が微量に出土している。また、1点のみであるが、江戸後期の錢貨「寛永通宝」が出土した。その他の小穴については、径20～30cm、深さ20cm程度のものが多数見られた。

これらの遺構群のほとんどが近世以降のものであり、下面の基盤層を削平後に整地に及んでいることから考えて、概ね江戸期における社内整備の過程での遺構として認めることができよう。

III.まとめ

今回の調査では、柿本廃寺に伴う遺構等を確認することはできなかった。調査地近辺までの広範囲にわたる社内地の整地により削平されたことが要因として考えられよう。しかしながら、調査地北側および東方の丘陵部縁辺付近では、これまでに奈良時代の土器や瓦片が多く採集されており、今回調査にかかった境内の平坦地のみが神社内整備のために過去に破壊されていたことがわかる。

今後は前記の丘陵斜面～先端付近での開発行為に注意すべきであろう。

2. 長岳寺旧境内地遺跡 - 柳本町

I. はじめに

今回の発掘調査は、長岳寺旧境内地内の南西に位置し門前の南側に該当する。そのため当寺に隣接する建物あるいは付随する諸施設の有無確認を目的として天理市トレイルセンター建設予定地の建物部分全域を対象とした調査を進めた。当該調査は長岳寺における初の考古学的な調査事例であり、古文書等の文献資料のみに偏重されることの多い大和の中世寺院の実像を探る手掛かりとなる調査でもあったが、結果的に当初の予測を超えるほどの多くの貴重な物証を得ることができた。

現地における調査は、平成10年9月1日より開始し、12月5日にすべての調査にかかる作業を終了した。総調査面積は約800m²であった。なお、調査途中で台風被害による中断期間をはさみ調査の遅延、一部の記録作成等で支障が生じたため調査内容に不充分な点が残されたことが悔やまれた。

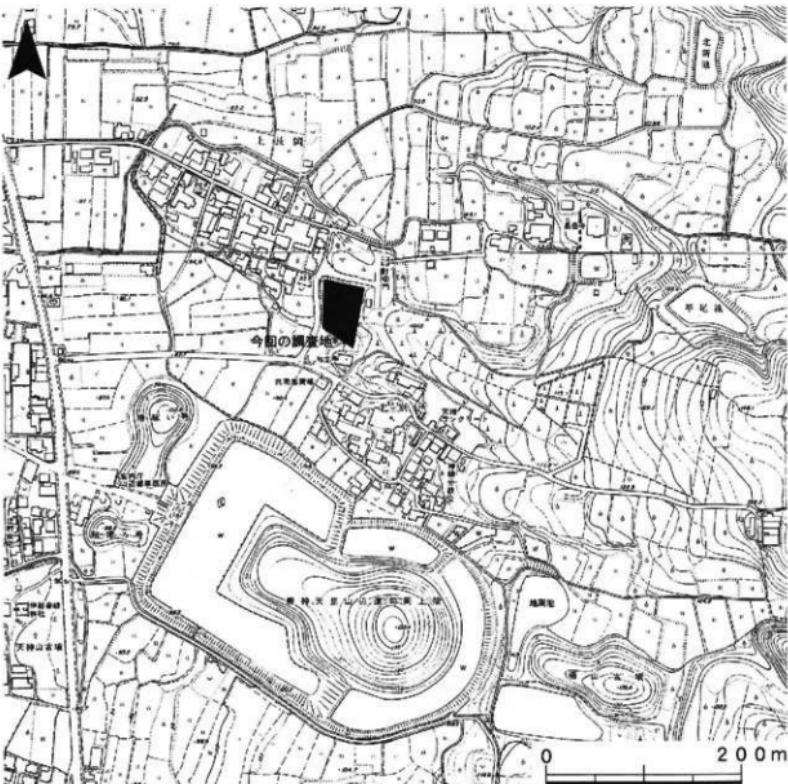


図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

II. 遺跡の環境

1. 立地環境

長岳寺および調査対象地の立地する門前の地域は、盆地東部山麓より西方へ延びる丘陵より派生した尾根筋上に該当する。当遺跡は、南側に崇神天皇陵を望む位置関係となる丘陵南辺の平坦面から斜面上に拡がりが認められ、ここより東側の南北に拡張した幅広い丘陵上に長岳寺の寺域が所在する。おそらく開山以来周辺地形の改変を重ねながら寺域の整備をおこなってきたものと思われる。今回の調査地はその山門を出て南側の位置に該当する。

2. 歴史的環境

長岳字の沿革および現在までに至る歴史的経過は次の通りである。

長岳寺は山の辺の道沿いの柳本町上長岡集落に近い釜口山に所在することから釜口山長岳寺といわれる高野山真言宗の寺院である。創建時期については『長岳寺金剛身院旧記』に「当山開基者弘法大師五十一歳之開基也 則人皇五十三代淳和帝天長元年歲次甲辰夏六月也...」、また『伽藍開基記』にも「和州釜口山長岳寺者以高野大師為開山始祖...」とあり平安期に空海が開いた寺院であるとされている。『普賢院記録』によれば嘉祥元年（1225）八月に叡尊が釜口別院律家である靈山院の僧静慶について修行し弘安四年（1281）には梵網經を講じたことなどが知られる。

鎌倉時代には興福寺大乘院の末寺となり、室町時代には在地土豪である楊本氏の外護にあずかったが、『大乗院日記目録』によれば文亀三（1503）年二月に兵家より焼失したことが伝えられる。天正八（1580）年に寺領は三百石であったが、織豊期には寺領が没収されたのち慶長七（1602）年八月には徳川家康より寺禄百石が寄進されている。明治六（1873）年に寺禄が廃止されたため現在の本寺および塔頭の普賢院、自性院のみとなり、そのうちに本寺のみとなって寺域の縮小が進んだ。

III. 調査の概要

1. 層序

今回の調査地では、遺構検出面はほとんど花崗岩バイラン土壌を基調とした基盤層上面であったが、調査区北半平坦面の西側には部分的に厚さ20~40cmで中世後期を主体とする遺物包含層の遺存が認められた。その他の部分では重複関係の著しい遺構面の上部を近世以降の削平、擾乱により失われた状況が確認されている。

2. 主要な検出遺構

中世後期以前の遺構群

調査区南側斜面において古墳前期の方形堅穴住居（一边6m）1棟、古墳後期の小規模な横穴式石室を埋葬主体とする古墳（円墳・径約7m）1基、長岳寺創建以後の平安末期の土坑墓等の墓坑2基が検出されている。また、調査区北側の西端では13世紀後半代を主体とする多量の土器類を一括埋置した鎌倉期の大型土坑（東西長径8m以上）が1基検出されている。

中世後期の遺構群

調査区全域の土地の高低差を巧みに利用しながら各所に炉跡、区画溝、排水施設を形成する溝や鉄器生産の各工程に関わる石組土坑等が分布する。径約3mの水溜のための大型円形の土坑（井戸）を中心として東西南北の各方向に放射状に伸びた区画割のそれぞれに「L」字状あるいは「コ」の字状の5~6m四方の方形区画が形成され、内部に炉、土坑、焼土面を伴う作業場としての単位を認めることができ



図2 調査区平面図 (1/200)

る。区画割には遺構間の重複関係もあり、さらに細かい時間的推移、変遷を知ることができるが、いずれにせよ室町期においてこうした工場制の工房群を集約させた画一的な鉄製品生産組織の出現が窺える遺構群である。また、これら遺構群の存在から『大乗院雜事記』の寛正三年(1462)の記録にある釜口座大工の記述や長岳寺大門(肘切門)にまつわる刀鍛冶と僧兵の登場する説話等の文献、説話により知られていた室町期の長岳寺全盛期の頃の寺の直轄管理にあった職業集団(座)の存在がより明瞭なかたちで実証し得る資料となり、さらにその実態を知ることのできる有効な資料となるものである。

戦国期の頃には前代の座の形態は遺構群の破壊、人為的な埋め立て行為により解体されることが判る。前代より在地の武士、土豪による保護の下に安定を保っていた寺の經營基盤が外來の織田、豊臣勢力の台頭により攻められて寺領を没収された結果と言える。そのため座の解体を余儀なくされ、その時点で当地における鉄製品生産は終焉を迎えることになる。遺構群の埋め立て土出土の土器類の編年観より概ね16世紀後葉には生産遺跡の痕跡すら認められない状況に変貌していたことが窺える。

近世の遺構

当調査区の範囲では建物を構成する柱穴(掘立柱、根石をもつものも見られる)を多数検出しており、前代の工房群とは一転して宅地としての土地利用がおこなわれている。『大和名所圖会』に見られるような東西棟の小規模な建物群の存在が想定できるものであり、周辺には宅地内の区画溝となる石組みや素掘り溝も検出されている。おそらく、これらの建物群は門前の市や民家となっていたのであろう。



写真1 古墳前期の住居（西から）



写真2 古墳後期の横穴式石室（南から）

3. 主要な出土遺物

土器類

鎌倉～室町・戦国・江戸前半期までの土器類が多く出土しており、遺物総量はコンテナ約60箱程度である。このなかにはわずかではあるが、庄内～布留式土器の小片や古墳後期～奈良期に帰属する長岳寺開山以前の遺物も含まれている。数量、内容ともに鎌倉期の土器類が最も多いが、これらのほとんどは調査区北西端の大型土坑出土の一括埋置された中世土器群によって占められている。室町期以降の土器では完形を留めるものはほとんど見られず、破片資料が主体を成す。

鉄製品

当遺跡の性格を示す鉄製品生産に関連する遺物としては鉄滓、各種鉄製品の断片等が出土している。釘、刃物類の断片、座金具等の製品が少量出土しているが、生産遺跡である性格からか製品の出土はほとんど認められない。鉄滓は、径5cmほどの楕円形のものが最大で、他は親指大程度の大きさのものが多数出土している。

銭貨類

遺物包含層および遺構埋土より中国宋代（北宋）の渡来銭が出土している。元豐通宝（初鑄年1078年）と天聖元宝（初鑄年1023年）の2点があり、ともに铸造年代は11世紀代である。

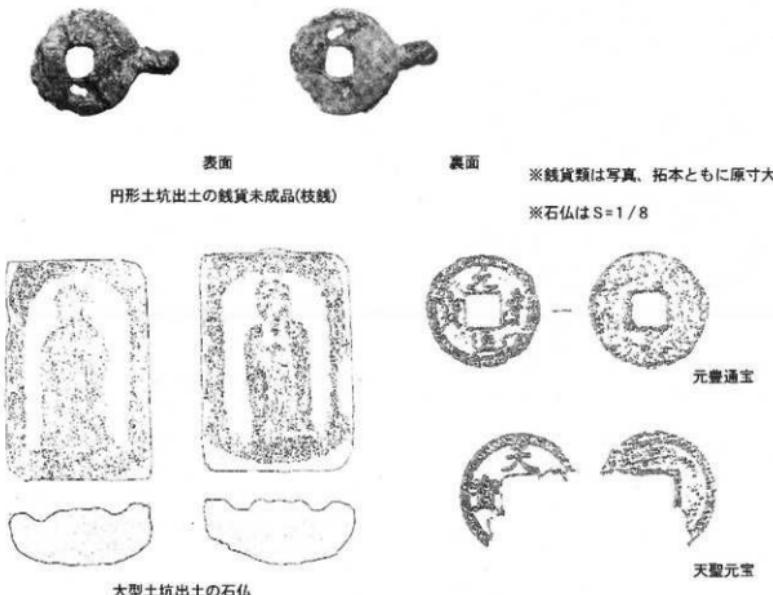
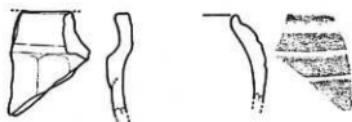


図3 出土遺物1



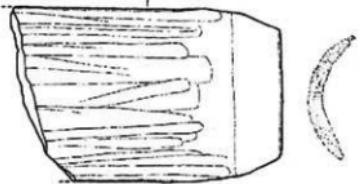
土師質小皿



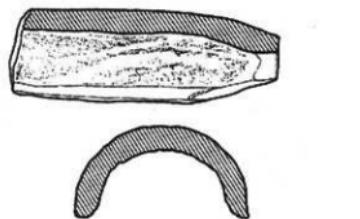
瓦質土器



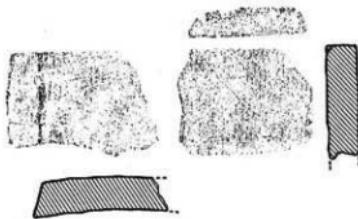
陶器・磁器



軒平瓦



丸瓦



平瓦

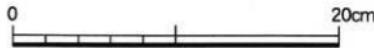


図4 出土遺物2 (S = 1/3)

IV. まとめ

今回の調査では以下のような事柄を知ることができた。次にその要点を列記し、一応のまとめとしておきたい。

当調査区では13~16世紀の鉄製品生産に関連する遺構群を確認し、その変遷を考えることができた。具体的には小規模家内制から大規模工場制への移行過程であり、その画期として「座」の成立時期を想定できるものである。

鉄製品生産関連の「座」は、戦国期の社会変動、支配体制の变革により解体され、寺の規模縮小とともに終焉を迎える。その時期については16世紀代の前半頃が考えられる。

前記の「座」については、これまで文献資料のみに窺い知ることができたが、今回の調査により初めて考古学的な調査事例をもってその実態を知ることのできる材料が得られたことが最大の成果と言える。



3. ハミ塚古墳 - 岩屋町

I. はじめに

ハミ塚古墳は、天理市北部の岩屋谷に築かれた6世紀末から7世紀初頭の巨大な方墳である。平成9年の奈良県立橿原考古学研究所による石室および周辺の範囲確認調査の際には石室内の家形石棺、周濠等を確認している。

本調査は、ハミ塚古墳に南面する道路北辺において下水道管配管設工事に伴って実施した発掘調査である。現状のハミ塚古墳前面を横断するように配管工事が予定されていたため、当初は平成11年1月11日より19日の間に現状の墳丘西端前面、石室前面（第1トレンチ）、墳丘東端前面（第2トレンチ）の三ヶ所についての調査を実施した。その結果、東端の第2トレンチで周濠埋土および葺石を伴う外堤法面を検出したため、さらに東側延長部分に外堤の外側を確認する目的で第3トレンチを追加設定し、2月1日、2日の両日にわたっての調査を経て現地におけるすべての作業を終了した。従って計四ヶ所の調査区で総調査面積は35m²であった。なお、前記の奈良県立橿原考古学研究所の調査成果については平成15年に調査報告書が刊行されており、今回の調査成果も収録されているので参照されたい。

II. 調査の概要

1. 事前の調査区（墳丘西端前面）

道路舗装面より18mの深さまで掘削して土層観察を実施したが、調査区内のほとんどが著しく搅乱を受けておりわずかに東端部分にのみ墳丘盛土の遺存を確認したに留まる。

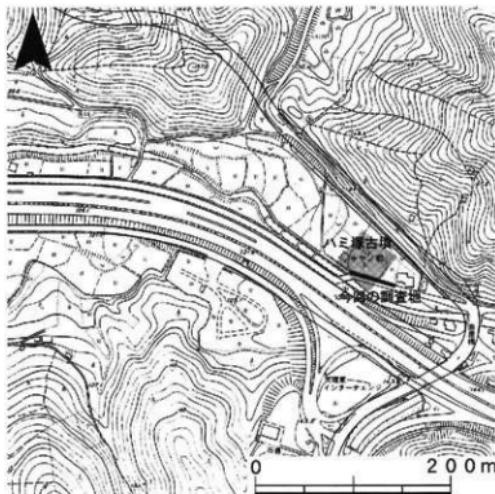


図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

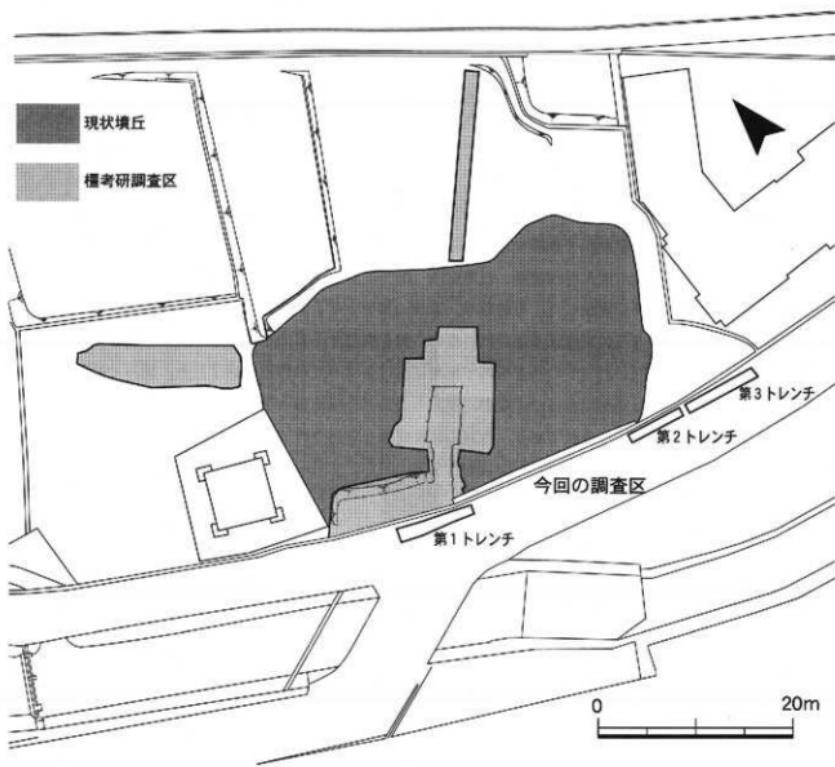


図2 調査区位置図 ($S = 1/500$)

2. 第1トレンチ（石室前面）

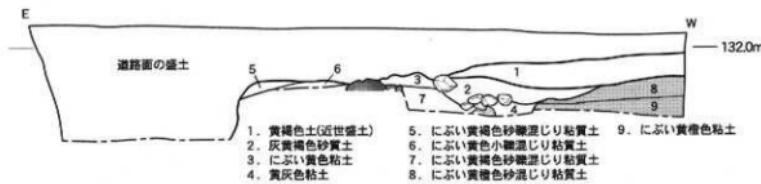
当初より石室羨道部床面の石組排水溝延長部分の遺存状況確認を目的として実施した。結果的には、権研調査区よりさらに1m分の延長距離での遺存を確認し、排水溝と石室側壁の石材抜き取り痕跡を確認している。また、排水溝の上部覆土より須恵器台付き壺の小片が出土している。

3. 第2トレンチ（墳丘東端）

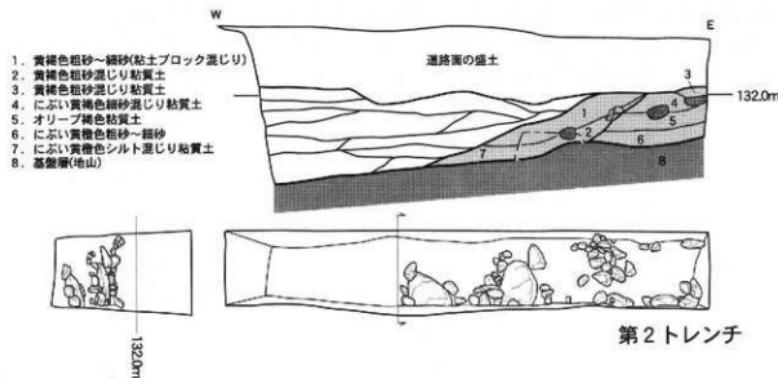
墳丘裾部の葺石、周濠の有無と位置確認を目的として調査を進めた。調査区西半より東側に下降する斜面に人頭大の礫を用いた葺石と横幅40~50cm大の基底石をそれぞれ確認し、墳丘側から周濠底面までの位置、深さ等を知り得た。

4. 第3トレンチ（追加調査区）

周濠内部より外堤内側法面を確認する目的で延長部に設定した調査区である。結果としては、第2トレンチと同様な石材利用の葺石が東方に積み上げられた状況が確認された。



第1トレンチ



第2トレンチ

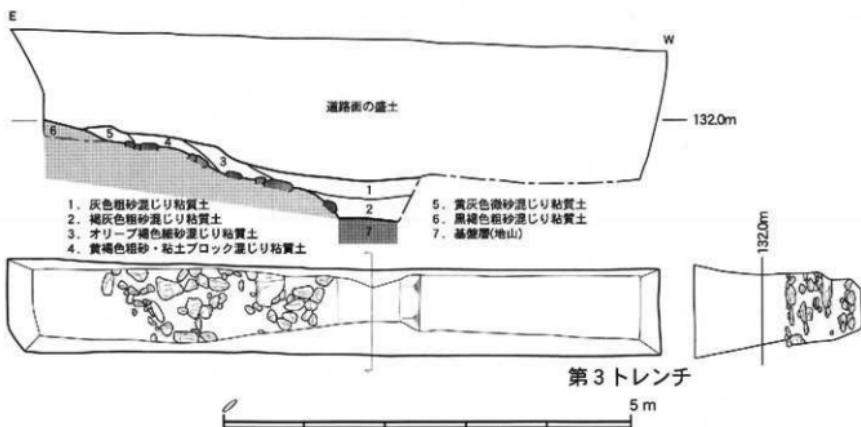


図3 各調査区平面・土層図 (S = 1/60)

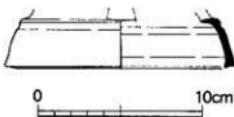


図4 出土遺物 (S = 1/3)

III. まとめ

今回の調査では、墳丘前面における狭長な調査区による確認調査であったにもかかわらず上記のような成果を納めることができた。前年に実施された墳丘部と石室内の調査成果に加えて追認できた事実は多くそれらについては櫻原考古学研究所の調査報告で総合的にまとめられた通りである。市教委調査分については先に当該報告書に収録されているため成果の多くは同書に譲るものとしておきたい。

4. 天理駅前試掘調査 - 川原城町

I. はじめに

今回の試掘調査は、天理市都市計画課（調査当時）による天理駅前整備事業に伴う事前の遺跡、遺物包含層の有無確認を目的として実施した発掘調査である。調査は、当該事業予定地内の条里遺構近接地に幅5mを基準とする調査トレンチを南北50mにわたって設定し確認調査を行なった。

現地における調査は、平成11年2月8日より同月17日までにおこない、総調査面積は250m²であった。調査にあたっては、駅前の通行、車両の出入りの多い地点であったため安全管理に留意しつつ作業を行なった。

II. 調査の概要

調査では、現状のアスファルト敷き上面より約1.3~1.5mの深さまでに駅前広場の整地に伴う造成土（客土）層が見られ、これら上部層以下では直下に灰色の粗砂、細砂が全域に拡がる状況であった。砂層



図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

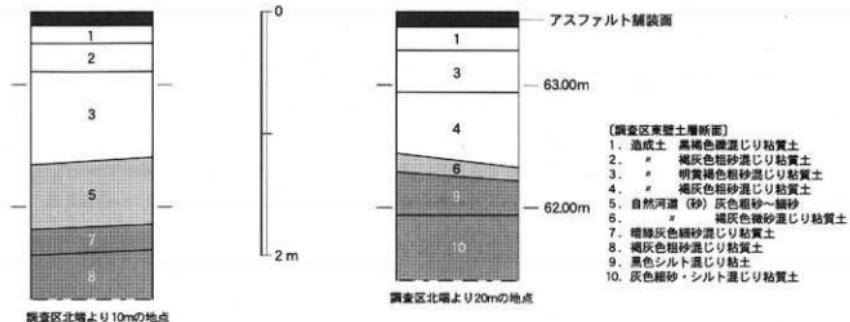


図2 調査区土層図 (S = 1/40)

堆積のベース層となるのは下位の褐灰～黒色の粘土層であるが、それ以下では砂礫、粘土の交互堆積層が続いた。従って、当該調査地周辺では数時期にわたる洪水砂の堆積が認められる氾濫原もしくは歴代の河道が重複する低湿地に該当するものと考えられた。

検出された自然河道は、砂礫の流れの観察と地形より北東～南西の流路と考えられた。遺物についてはこの間の堆積土中にもまったく含まれておらず、時期についても条里施行以前の平安期がその下限となることのみ指摘される。

III. まとめ

以上のように、今回の天理駅前試掘調査では顕著な遺構、遺物を確認することはできず遺跡の存在は認められなかった。しかしながら、自然河道の検出により旧地形の一端が窺えた点のみを評価しておきたい。

平成11年度
(1999)

5. 矢矧塚古墳 -成願寺町-

I. はじめに

今回の調査は、大和古墳群西方の矢矧塚古墳墳丘裾に隣接した地点での下水道管理設工事に伴い、当該工事にかかる掘削に際して墳裾部分の破壊が予想されたため事前の確認調査として実施したものである。前年度の周辺部における試掘、立会(平成10年9月6日実施)の結果から、当該地のなかでもマンホール設置に伴う掘削深度の深い工事箇所に限定して発掘調査をおこなうこととなった。調査は、後円部およびくびれ部の北側に2m四方の堅坑をそれぞれ設定し、2ヶ所についての確認をおこなった。

調査にあたっては、現地表下約1mまでを重機掘削により除去し、以下はすべて人力掘削で掘り下げつつ堆積層序の把握と遺構の検出、確認に努めた。また、最終的には地山面となる基盤層までの確認をおこなったが、狭小な調査面積であったため平面的な遺構検出はまばら、土層断面の観察と各堆積層の形成時期幅の理解を進めるに留まることとなった。

現地における調査は、平成11年7月7日より開始し11日にすべての作業を終了した。総調査面積は約8m²であった。

II. 調査の概要

1. 西調査区の調査成果

北側くびれ部墳丘裾の該当する西調査区では、現地表下約0.8mで第1層以下の耕作痕跡を示す搅乱土壌の床土面となる第2層を確認した。その直下の第3層および第4層では親指大～拳大の礫を多く含む砂質土が墳丘側から流出したように混在、堆積し、以下の第5層では堅く締まった砂礫土の地山相当層となり全く遺物の包含は認められなかった。これより下位でも無遺物の細砂、シルト質粘土が続き、第5層以下が基盤層となることを示している。なお、遺物は第5層より上位で土師器、中・近世土器等の細片が極わずかながら出土している。



図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

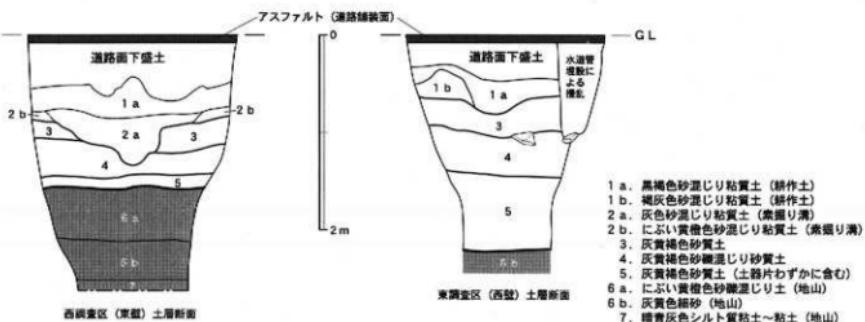


図2 各調査区土層図 ($S = 1/50$)

2. 東調査区の調査成果

後円部墳丘裾に該当する東調査区では、第1層の耕作土以下に第2層と第3層の砂質土の堆積が現地表下約1.4mまで続くが、この間には陶磁器、土師質土器等の近世土器片が含まれていた。これより下位の第4層では、層厚0.8mの上位に古墳前期の土師器小片と砂礫を多く含み、下位では遺物量は少なくなるものの粘性の強い土壤となっていた。この直下の第5層は無遺物で堅く締まった砂礫土となっていたため基盤層であると認識した。

III. まとめ

今回の調査では、西調査区において墳丘上より流入した葺石石材らしき礫の堆積を確認し、西調査区第5層上面が墳裾の現況を示すものと考えられた。また、東調査区でも現地表下1.4mまでに近世頃の改変がおよぶものの、墳裾付近は西調査区と同様に残るものと判断することができた。いずれにせよ、小面積での調査であるため即断はできないが現況での遺存状況の一端を知ることができたものと評価しておきたい。

6. 田町遺跡－田町

I. はじめに

田町遺跡における発掘調査は、今回の大規模小売店舗建設を契機としてはじめて実施した。当該開発行為にかかる敷地面積が約9,000m²と広大であったため、敷地内における遺構の有無および地下遺構の遺存状況を確認するため平成11年3月17～24日に実施した建物部分と駐車場用地における試掘調査の結果を踏まえ、開発業者、原因者との事前協議をすすめた結果、店舗建物建設工事に伴う地下遺構の破壊がおよぶ部分に重点を置いた本調査を実施するに至った。

当遺跡の周辺においては、対象地北辺の東西道路（都市計画道路・天理～王寺線）敷設の際に調査された合場遺跡が西方約2.0kmの地点に所在し、さらに西側でも約2.5km先に嘉幡遺跡が所在する。これらの遺跡はともに弥生後期末～古墳前期の集落遺跡であり、当散布地の北西方約2.0kmに位置する弥生前期より古墳後期にまで継続的に集落が営まれる拠点集落である平等坊・岩室遺跡の周辺への拡散形態として位置付けられる。また、東方、東南方では約2.0km以遠の東山麓沿いに前期古墳の密集する大和・柳本古墳群が展開し、北東方約2.0km前後の距離において古墳時代集落として著名な布留遺跡が広範囲に拡がりをもって展開する。

なお、現地における調査の進行に際しては平成11年4月5日から5月31日にかけての期間に、約1000m²の調査面積に限定された状況で実施し、実働日数約40日を要した。



図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

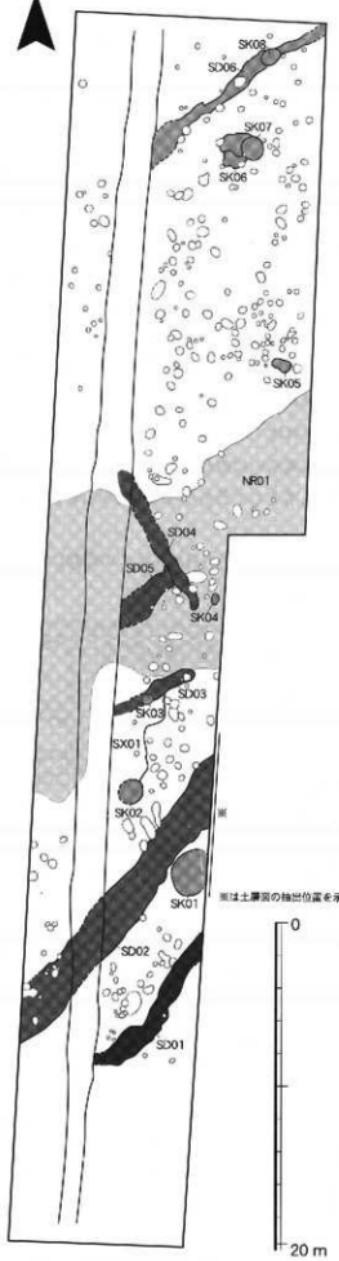


図2 調査区平面図 ($S = 1/300$)

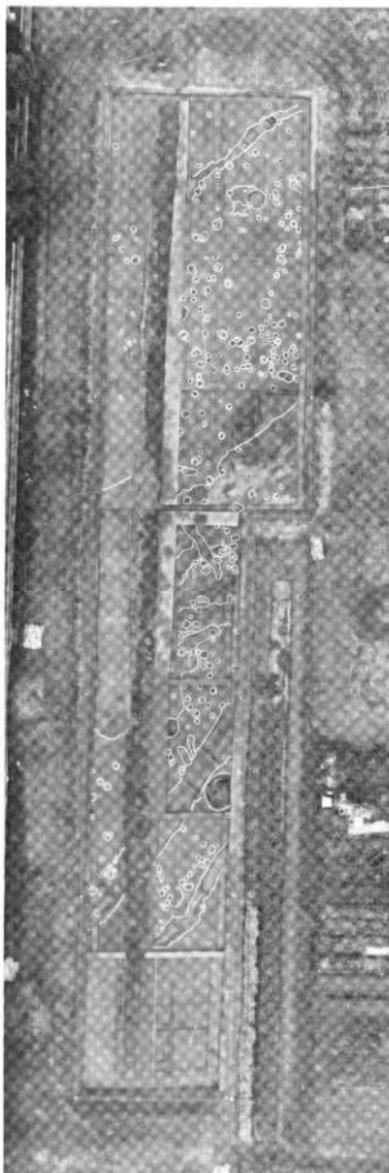


写真1 調査区全景（上空から）

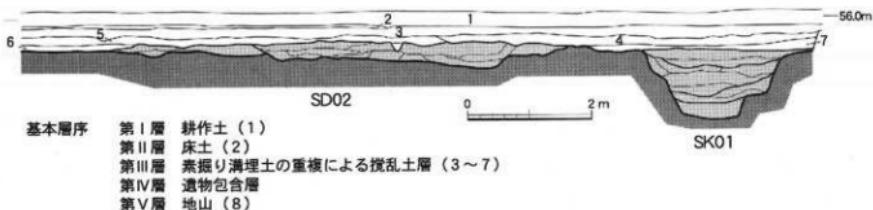


図3 調査区南半東壁部分土層図 ($S = 1/80$)

II. 調査地の立地環境

当遺跡周辺では、古墳時代集落が多く確認されている。にもかかわらず、今回の調査以前では当地域については全くの集落の空白地帯であるように思われていた。現状の周辺地形を見る限り、北辺から西方にかけて南流する布留川支流に囲まれた標高56m前後の低地であるためか、ここに良好な遺存状況で遺跡の所在が確かめられようとは考えられなかつたのであろう。つまり、中世以降の農地拡大と灌漑目的の地形変更による結果、現代に至るまで元来低地であったと錯覚させられていたためであったに違いない。こうした事例から現状地形による遺跡の有無判断には予断を許さぬものと反省せねばならないだろう。ただ、近接する河川の氾濫や改修工事の際の遺物出土から遺物散布地として認識されていたことが幸いであったと言える。

III. 調査の概要

1. 層序

調査区における層序は、調査区が南北に長いため地形的に起伏の差が著しい状況を把握することが可能であったため、調査区中央を斜行する自然河道NR-01を挟んで大幅な変化が看取できた。

調査区全域の現地表面である水田面はほぼ水平で標高56.1m前後であるが、遺構検出面となる地山面上に至るまでの堆積層は自然河道北と南では大きく異なり地形的に徐々に下降する南半においては良好な遺物包含層の遺存状況が認められた。また、調査区の北半では地山面上にまで歴代の耕作痕跡である中世以降の南北方向に伸びる素掘溝群が掘り込まれ遺物包含層はほとんど認められないままに下部の遺構検出に至った。つまり、調査区北半の層序は基本的に耕作土（第Ⅰ層）、歴代素掘溝の重複による擾乱層（第Ⅱ・Ⅲ層）と続き標高55.6m前後で地山面となる。この地山面は南側に向かって途中に水田面の段差を見せて自然河道上面と連続するが、自然河道埋没後の直上面付近で南北地割は終わりは自然河道の流路方向に重なるような北東～南西方向への斜行地割に変化している。おそらく自然地形に左右された結果、この付近にのみ条里の乱れが生じたのであろう。

次に、自然河道の南岸から調査区南端にかけては調査区北半の第Ⅰ層、第Ⅱ・Ⅲ層と同様の上部堆積層が続くが、途中に地山面（第Ⅴ層）との間に古墳時代の遺物包含層（第Ⅳ層）を介在し、その上面および下部の第Ⅳ層直上において溝、土坑等の遺構検出を見た。なお、これらの遺構は調査区南端付近ではその分布が希薄となり、地山面となる第Ⅴ層上面は南端で標高55.1mと低く南向きに傾斜している。

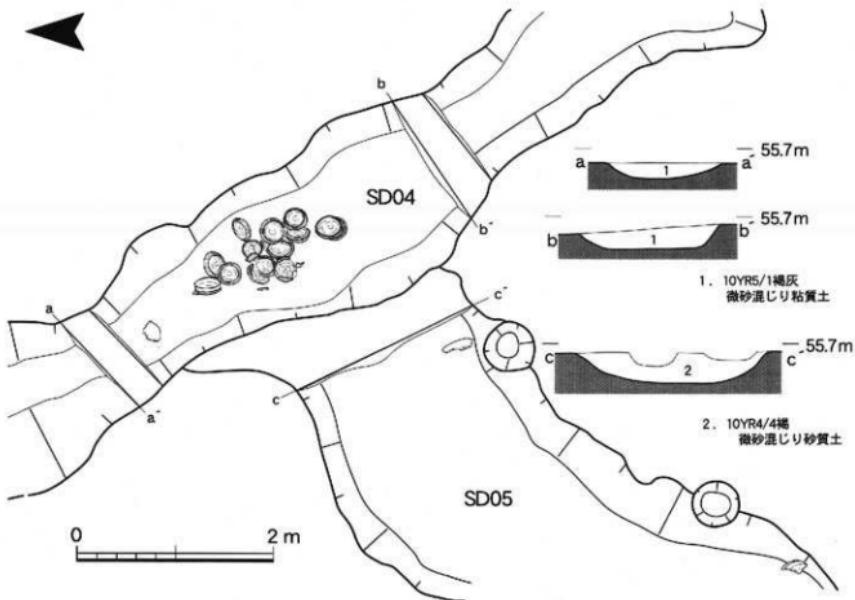


図4 溝SD 04・05平面・土層図 (S = 1/50)

また、調査区の南西隅ではさらに地山面の窪みが認められ、弥生中期後半の土器を伴う砂層の堆積が確認できたが、その下面にも粗砂、粘土の互層堆積が続くことにより旧来の自然地形として流路の存在が想定できる。

2. 主要な検出遺構

調査区の全面にわたり中・近世以降の耕作による削平を受けているにもかかわらず、弥生中期後半から古墳時代全般までに帰属が求められる土坑、溝、柱穴群等の遺構を検出している。以下、時期別に概観する。

最も時期の遅いものは自然河道N R -01である。微量の縄文後・晩期土器片と弥生中期後半～後期頃の土器が出土している。出土量は少ないが概ね埋没時期の一端が知られる。次に、庄内式期古相の完形土器（初期庄内壺）が出土する土坑SK -07、あまり例を見ない形態で内外面を削る台付鉢の出土した土坑SK -06も同時期のものと思われる。

古墳時代前・中期には遺構の数が多くなり、布留式古・中相土器群を多く出土した土坑（井戸を含む）が4基（土坑SK -01、土坑SK -02、土坑SK -04、土坑SK -07）確認されている。また、須恵器、土師器を多く出土した溝SD -02、TK 23型式の須恵器集積を確認した溝SD -04と遺物量は少ないがこれらを包括する時期幅の土器片の出土した溝SD -01、溝SD -06等の集落内外の区画溝として考えられる溝も検出しており、平面的な位置関係と帰属時期の検討から集落内の変遷課程が窺える遺構群といえる。

3. 出土遺物

各検出遺構および遺物包含層より多くの土器類が出土しており、その総数はコンテナにして約60箱によぶ。また、遺物包含層より玉類の原材料や未成品も出土している。以下にその内訳と特徴について列記し、特徴的なもののみ図示、詳述しておく。

土器類

遺構出土品には庄内式古相から布留式各段階の古式土師器、田辺正三氏の陶邑古窯址群編年のT K 23型式からT K 10型式にかけての須恵器とそれらに共存する土師器類が認められる。また、遺物包含層および上部の歴代素掘群による搅乱層からは微量ながらも飛鳥・奈良期の平瓦片や須恵器、土師器の土器

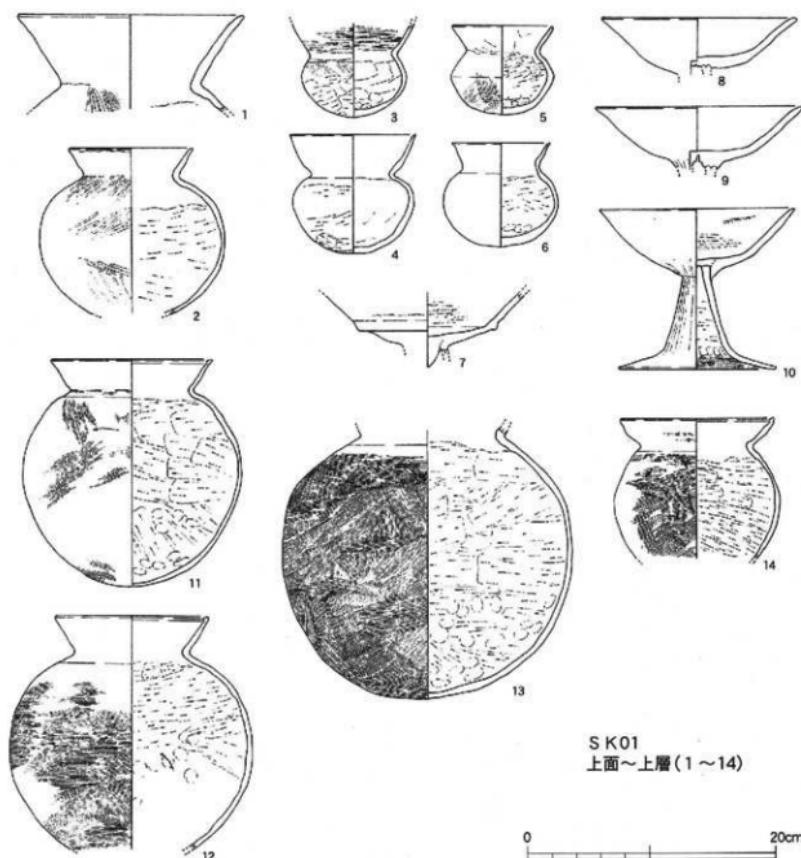


図5 出土遺物1 (S = 1/4)

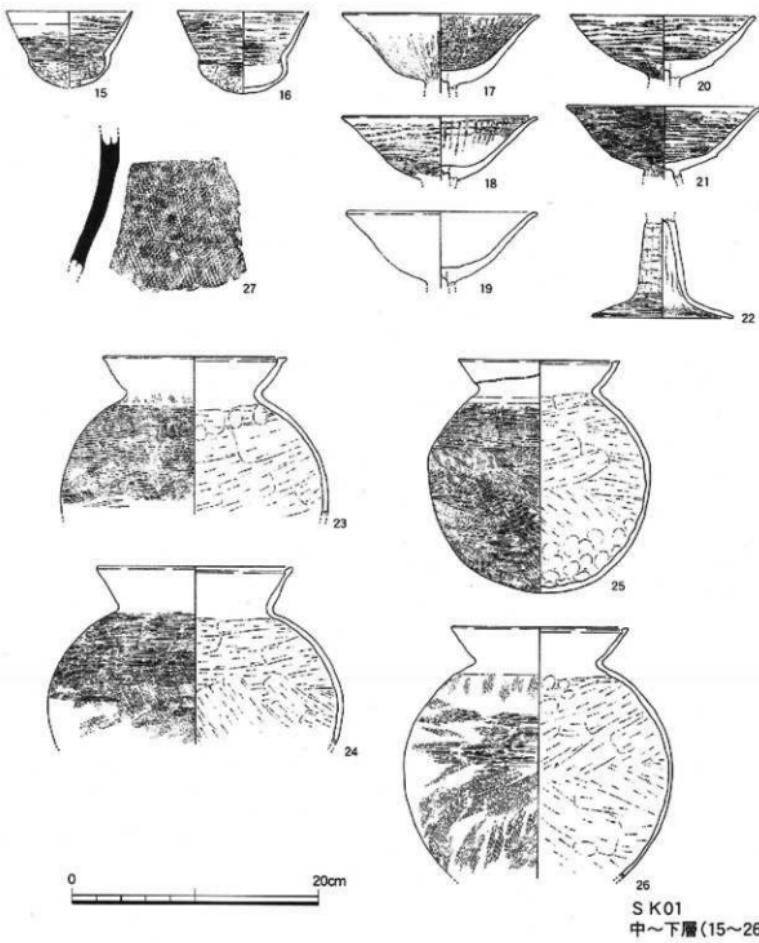


図6 出土遺物2 ($S = 1/4$)

類、中世前半期の小皿等の土師質土器類や龍泉窯系輸入青磁碗等が出土している。

最も時期の遅る土器としては自然河道NR-01上部堆積砂層出土の器面摩滅の著しい繩文後・晩期土器片があるが、同時に弥生中期～後期の土器類も出土している。いずれもこれらの時期に該当する土坑等の遺構は検出されていない。

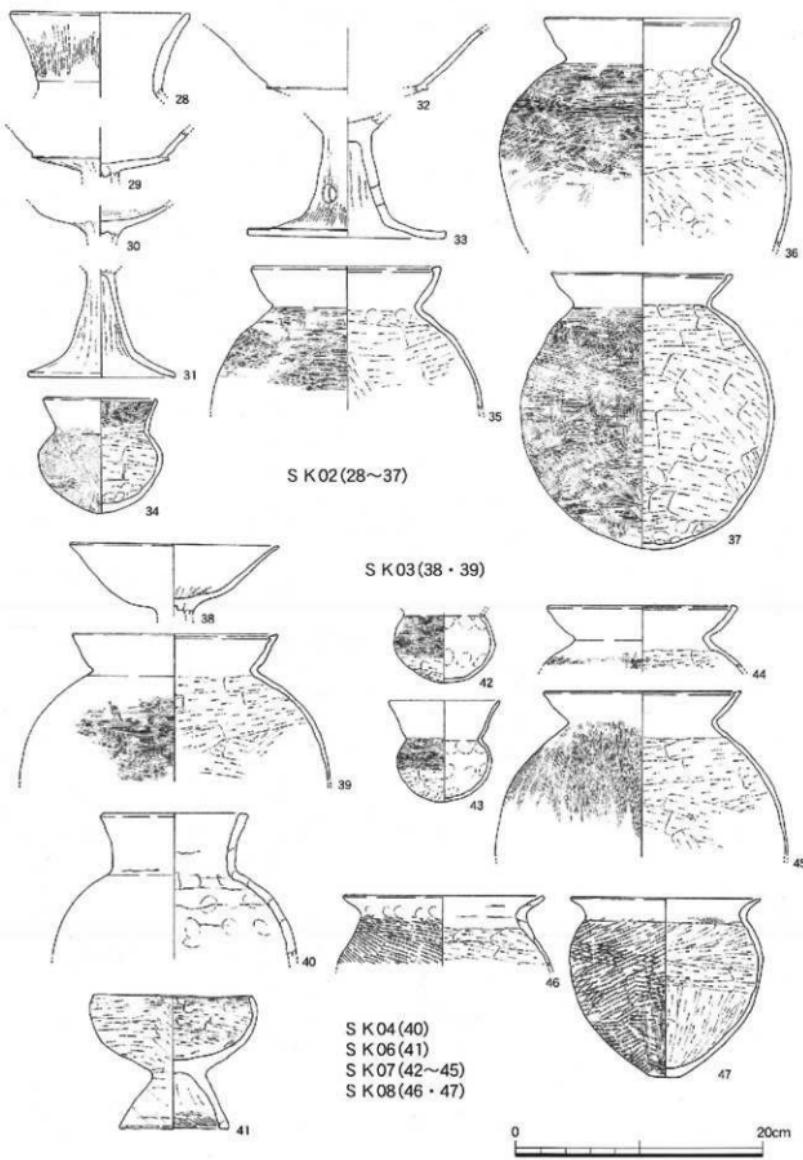


図7 出土遺物3 (S = 1/4)

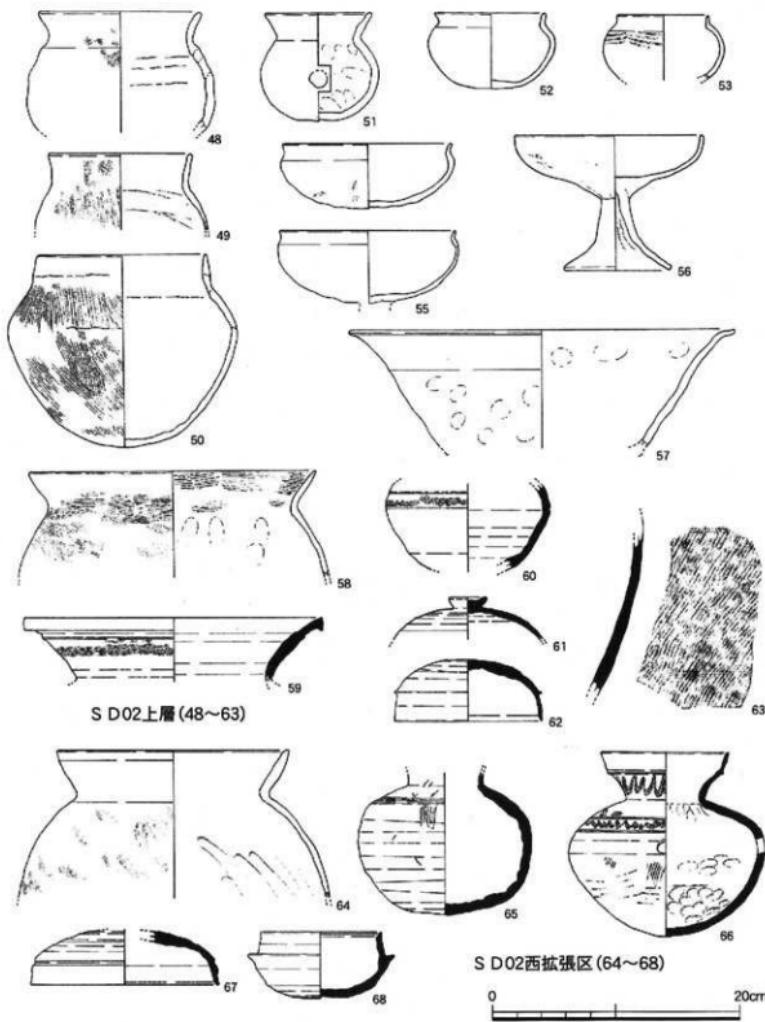
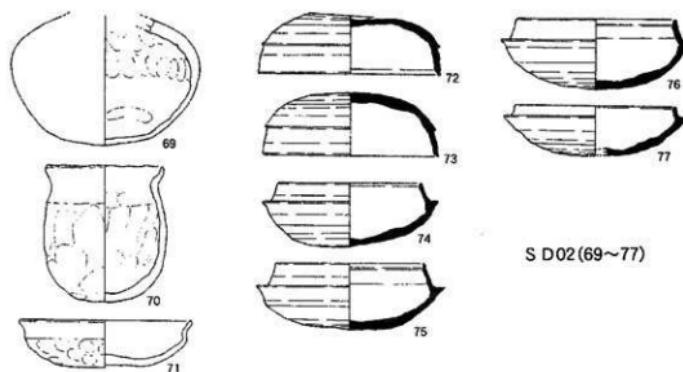
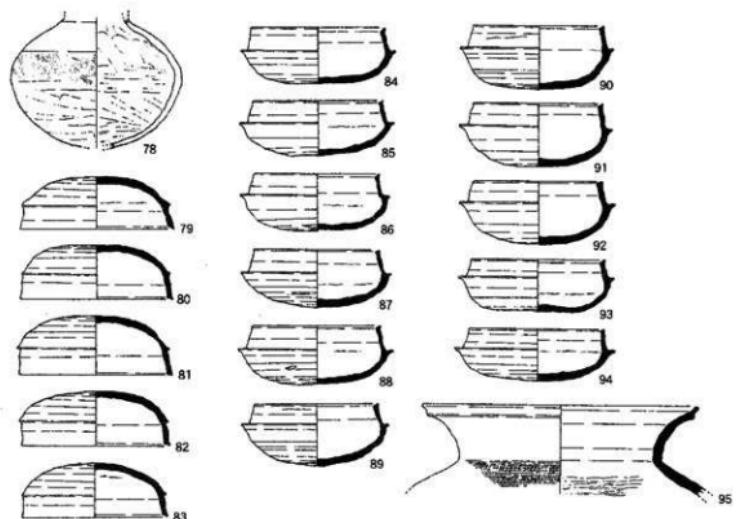


図8 出土遺物4 (S = 1/4)



S D02 (69~77)



S D04 (78~95)



図9 出土遺物5 (S = 1/4)

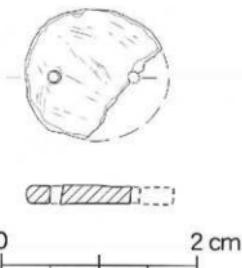


図10 出土遺物（石製品・S = 1/1）



写真2 出土玉類

石製品・その他

遺物包含層を含む上部堆積層より碧玉、緑色凝灰岩等の玉類原材料の分割礫、滑石製双孔円盤、碧玉製、緑色凝灰岩製の管玉あるいは白玉の未成品等がある。また、珍しいものでは片面のみに研磨が施された無孔のチャート製の研磨用石材が1点出土している。なお、これら玉類の加工に使用されたと思われる台石、砾石の類もいくつか認められる。

この他にはサスカイト製の石歯、削器等の弥生中期・後期に帰属するものと考えられる石器類がある。

IV. まとめ

今回の調査では古墳前期より中・後期の間に営まれた区画溝の巡らされる集落跡を確認することができた。そのため、田町遺物散布地における集落について出町遺跡と命名することにした。

集落の始まりは遅って弥生中期後半～後期頃であると考えられるが、今回の調査区においては自然流路より土器の出土を見たに過ぎなかった。今後も近傍にその頃の広がりを確認することは可能であろう。実際に集落形成が始まるのは庄内式併行期以降であり、布留式占・中相段階を経て須恵器の普及するTK 23型式以前から6世紀後葉のTK 43型式併存段階頃までに区画溝を伴う集落の変遷課程が窺える。集落内の区画については初現期を5世紀中葉と考えることができるが、その後は内部区画の規模の変化や区画溝の再掘削等の行為がおこなわれながら6世紀後葉には集落が終焉を迎えているようである。また、集落内部では掘立柱建物を構成する柱穴群が多く認められ、区画の地割に沿うように復元可能である。遺物から認められる特徴としては滑石、緑色凝灰岩、碧玉等を原材料とした玉製品の生産が集落内でおこなわれていたことである。成品の出土は極めて少ないが、概ね4世紀中頃から5世紀全般ないしは6世紀に至るまでの集落継続期間のうちに玉生産がおこなわれていたようである。

最後に、今回の調査によって奈良盆地のなかでも確認例の少ない古墳時代集落の一例を追認することができた。その内容については今後の遺物整理を通じて明らかにしてゆきたい。なお、今回の調査地は集落の南限よりの地点であったため、中心的な地域は調査地の北東方向に展開することが予想される。今後はその近辺における開発行為の際に留意すべきであろう。

7. 田井庄町遺跡 - 田井庄町

I. はじめに

田井庄町遺跡は、大規模小売店舗建設を契機とした試掘調査により新たに確認された集落遺跡である。今回の調査地は、天理市街地の西方約1kmの地点に所在する田井庄町村落に近接し、天理市域中央を東西に横断する国道25号線北側の条里界に接した村落真南に位置している。

調査は、試掘調査により遺構・遺物包含層の存在が確認された調査区を拡張するかたちで実施した。現地調査は平成11年8月2日から開始し、同月30日にすべての作業を終了した。総調査面積は300m²であった。

調査の結果、室町時代を中心とする中世後期の村落周縁部における屋敷地等の生活痕跡を確認することができた。

II. 調査の概要

1. 層序

調査地における基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：旧耕作土

第Ⅲ層：遺物包含層（淡褐色細砂混じり粘質土）

第Ⅳ層：地山（黄褐色～褐色微砂・細砂・粗砂・粘土質シルト）

標高57m前後の現地表面からの地山面（第Ⅳ層上面）に至るまでには約50cmほどの深度であり、遺構検出については基本的にこの地山面直上でおこなった。また、地山直上には鎌倉・室町・江戸期初頭に

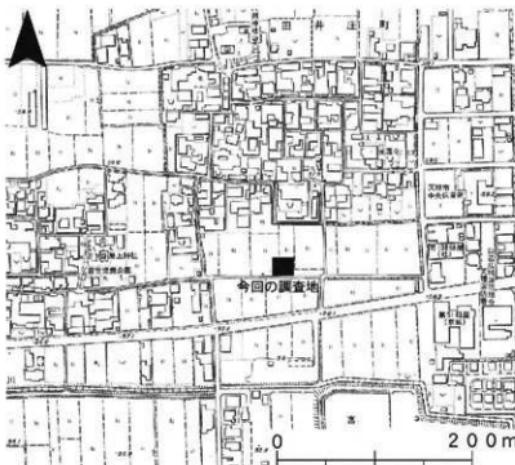


図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

かけての時間軸を示す遺物包含層(第Ⅲ層)の堆積が調査地の全面に認められた。そのなかでも調査区東端の部分にのみ微量ながら古墳前期の土器類が含まれていた。これら遺物包含層の上位では、途中に床土相当の堆積土を介在しつつ旧耕作土(第Ⅱ層)および耕作土(第Ⅰ層)となって現状の地表面となっていた。

なお、第Ⅳ層下部では現地表下約12m付近で暗褐色シルト混じり粘土～粘土となる硬質な基盤層が確認されており、遺構検出面とした第Ⅳ層上面の砂質土壤は基盤層上位に堆積した自然河道の氾濫原であったと思われる。

2. 主要な遺構と遺物

調査区の東半を中心として概ね中世後期(鎌倉～室町末)の居住地跡を検出している。この範囲で柱穴群が集中し、方画地割に沿うように建物を復元することが可能となっていること、建物の北西隅の方向で石組み井戸S E01が所在する点で、これらがある一定期間に屋敷地としての土地利用がなされたことが窺える。柱穴群には根石をもつものが多く見られるが、すべての柱列に残るような状況ではなかつたため明確な構成は把握できなかった。また、先述の屋敷とは別に調査区の北西隅にも方形の柱穴による建物の一角を検出しているが、若干の時期差が考えられ、出土遺物の時期よりやや古くなる建物と思われた。

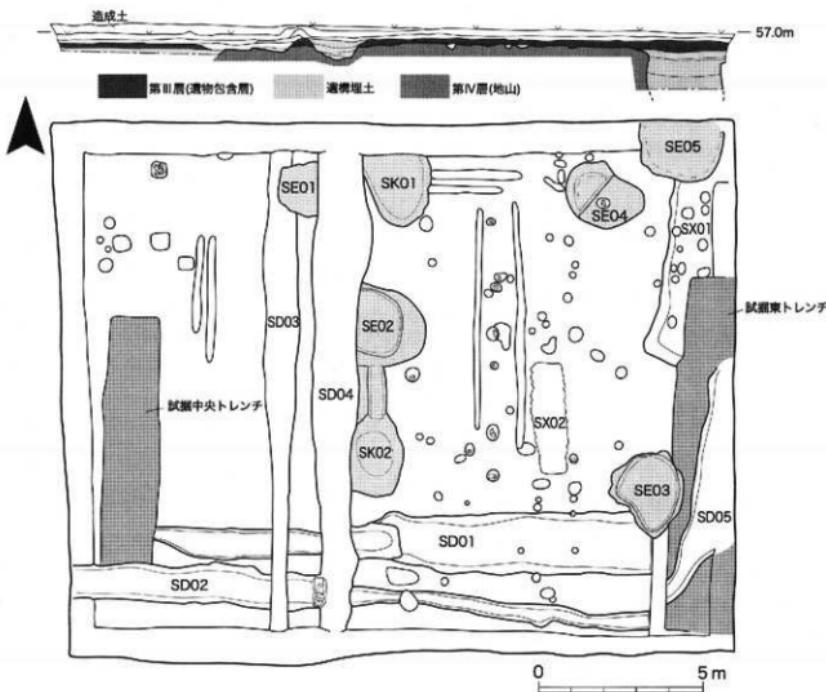
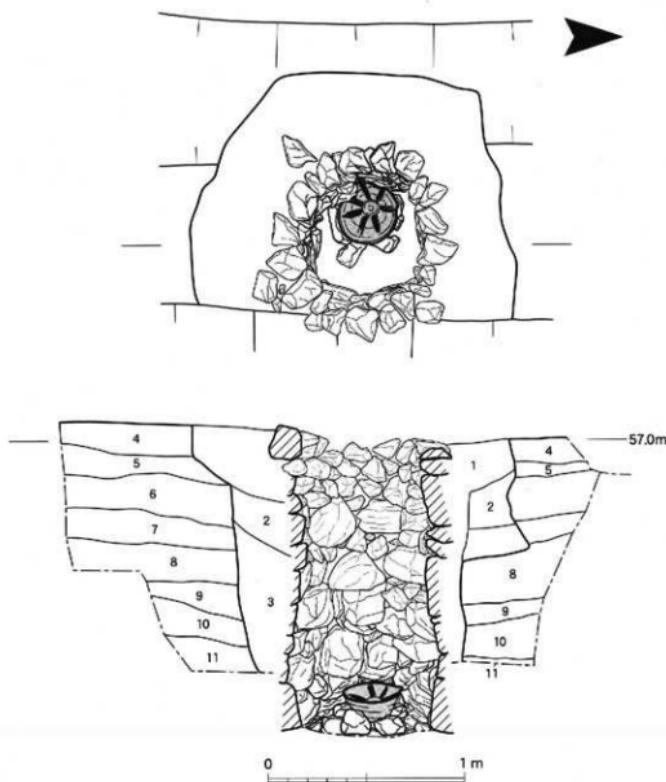


図2 調査区平面・土層図 (S = 1/150)



井戸 S E01 挖方埋土
 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じり粘質土
 2. 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じり粘質土
 3. 5Y2/1 オリーブ黒 微砂混じり粘質土

地山
 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 微砂混じり粘質土
 5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂混じり粘質土
 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 微砂混じりシルト
 7. 10Y4/1 灰 微砂混じり粘土
 8. 7.5Y4/1 オリーブ黒 微砂混じり粘土
 9. 5Y3/1 オリーブ黒 微砂混じり粘土
 10. 7.5Y4/1 灰 微砂混じり粘土
 11. 5BG4/1 暗青灰 微砂混じり粘土

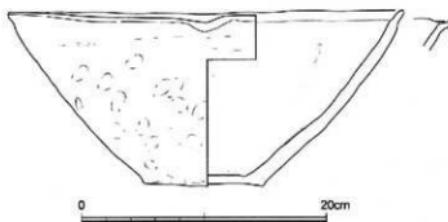


図3 井戸 S E01平面・土層図 (S = 1/25) および出土遺物 (S = 1/4)

東西および南北方向の溝群

東西溝 S D01およびS D02は、いずれもその真南に東西方向に延びる条里界と併行するかたちで検出している。特に、溝 S D02は条里に沿う道路側溝とも考えられるが、ほぼ屋敷地の全面で溝幅が細くなり橋脚となり得る柱穴も付随する点から出入り口が直交するように作られていたように思われる。溝 S D01は溝 S D02とは対照的に屋敷地の前面では溝幅が広くなってしまっており深度は浅いが、西半では幅が狭く深い。つまり、この溝 S D01は屋敷地の南辺区画溝としての機能が兼ねられていたのであろう。なお、南北溝 S D03と S D04はいずれも近世初頭の水田区画の溝であり2条の溝間の高まりが水田畦畔であることが北壁と南壁の土層断面より知ることができる。

井戸

調査地の東側に多く計5基を検出している。このうち井戸 S E03と S E05は近世初頭以降の時期の農業用の井戸であり、内部に井筒等の施設を作わない素掘りの井戸である。石組み井戸 S E01は、拳大から人頭大よりも大きめの石を交互に積み上げた正円の平面形で井筒を作る井戸である。おそらくや敷地内の生活用水確保のための井戸であったと考えられる。この井戸では、検出面より約16mの深さの底面近くに周間に支えとしての礫を並べて瓦質上器を正置させた井戸廃絶時の祭祀行為を確認している。この土器の時期より屋敷地の廃絶時期を知ることができる。

その他の遺構

井戸 S E02、S E05と北西隅の柱穴群がいずれも出土遺物の時期が近く同時併存していたものと思われる。また、東辺北部の不明遺構 S X01では出土遺物は少ないものの試掘調査時に古墳前期の高杯杯部片が出土していたため、平面形と底面での柱穴検出から堅穴住居と考えられた。当遺跡の調査では最も時期の遅い遺構となる。

出土遺物

調査では、各遺構、遺物包含層より鎌倉～江戸時代前半期頃までの土器、陶磁器類が出土し、総出土量はコンテナ約10箱分となっている。ここでは全体の概観と特徴的なものについてのみ記しておく。出土遺物の大半は概ね中世後期より近世初頭が主体となる。中世段階のものでは中国製の輸入陶磁器や漬戸・美濃系天目茶碗等が見られる。これらの土器類からは屋敷地内に生活していた人々の階層を窺い知ることができる。ほかに井戸 S E01より中国の渡来鏡である北宋鏡が出土している。木製品では井戸 S E01、S E04、S E05より漆塗りの椀がそれぞれ出土している。

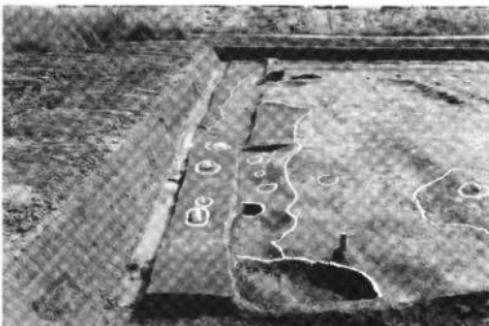


写真1 古墳前期遺構 S X01（北から）

III. まとめ

今回の調査では、限られた調査面積にもかかわらず中世後期より近世にかけての田井庄町村落南辺における土地利用の変遷を明らかにすることができた。以下、遺構の変遷を追って概観し調査成果をまとめておきたい。

まず最初にこの地に人が住み始めたのは古墳前期にまで遡る。これ以前は低湿地の縁辺で大河川の氾濫原となっていたようである。この後は鎌倉～室町の中世村落の一端の様相を呈するが、前半期は農地の一角として機能していたと考えられた。

屋敷地としての時期は概ね室町時代の範疇であるが、調査地における建物等の基礎構造里道（条里界）と接する立地から主要な棟を形成するものとは考え難いものである。おそらく主要建物は調査区より北側の現状の村落寄りにあったのであろう。

ここで問題としたいのは、これら建物の廃絶による農地への転換であり、遺構群のあり方により室町末期頃には村落の一角から田畠へと変質していたことが挙げられる。こうした変化の時期は田井庄町遺跡に限らず、これまでの中世末期の農村部等の調査例の多くが同時期の転換期を迎えることが知られている。つまり、室町末期～戦国期のいわゆる織豊期にそれまでの支配構造が一転することに起因する土地制度改革の結果として同時期性を認める現象であり、時代の大きな画期としての位置付けがなされるべき時間幅でもあることが当遺跡においても追証されたわけである。なお、この点については、検地帳や村方文書等の文献資料によってさらに意義付けの強調が可能である。

最後に、検出された屋敷地の主については前記の文献等による確認も可能と思われるが、出土遺物に高価な輸入陶磁器や遠方よりもたらされた国産陶器等が含まれることにより富裕な農民層としての位置付けが容易であった。実際には、名主、庄屋といった村内の支配階層と考えられるが、そうした実力者層の屋敷までも移動させ農地に転化せざるを得ない政治的圧力がかかるほどに世の中が著しく激変する時代であったと感心させられる。いずれにせよ、奈良盆地においてはまだ希少な中世後期の農村部の様相が知れる調査例となったことを評価しておきたい。

8. 備前環濠遺跡 - 備前町

I. はじめに

備前環濠遺跡は、天理市南西部の備前町村落の周囲にかつて存在した中世惣村を取り巻く環濠をさす。今回の調査は村落の東辺に所在する天皇神社北側の貯水池周囲の改修に伴って実施した確認調査である。調査は池北岸の護岸擁壁工事を主体とする一連の工事に先立ち、池岸中央に南向きに突出する小山（通称「丸山」）を東西に横断するトレンチ調査区を設定しておこなった。

現地調査は、平成12年1月21日より開始し、2月21日にすべての作業を終了した。層調査面積は50m²であった。

II. 調査の概要

調査にあたっては、東西方向のトレンチ調査区を東側の池岸から中央の「丸山」、西側のこ池内にかけて設定し、それぞれに東トレンチ、中央丸山トレンチ、西トレンチとして調査を進めた。以下、各調査区ごとに概要を記す。

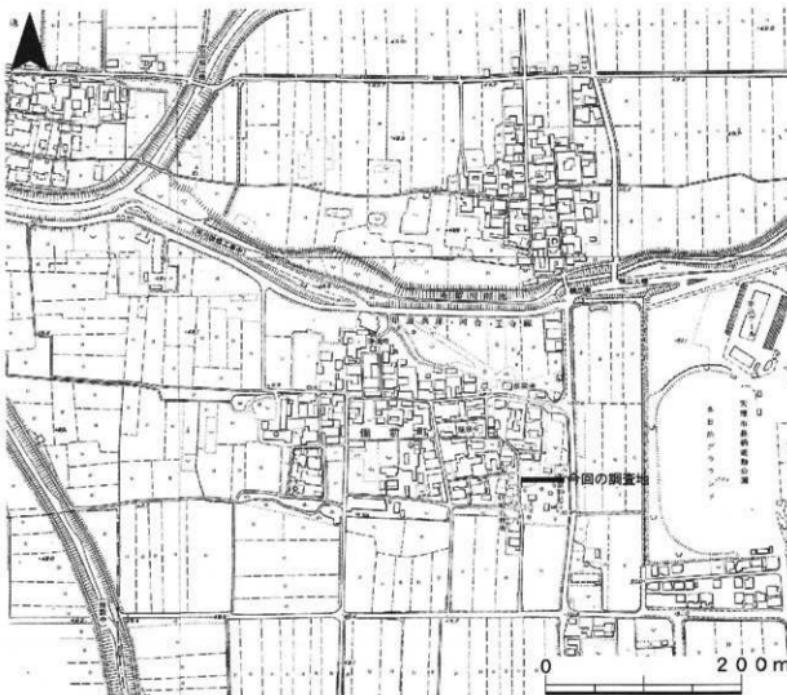


図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

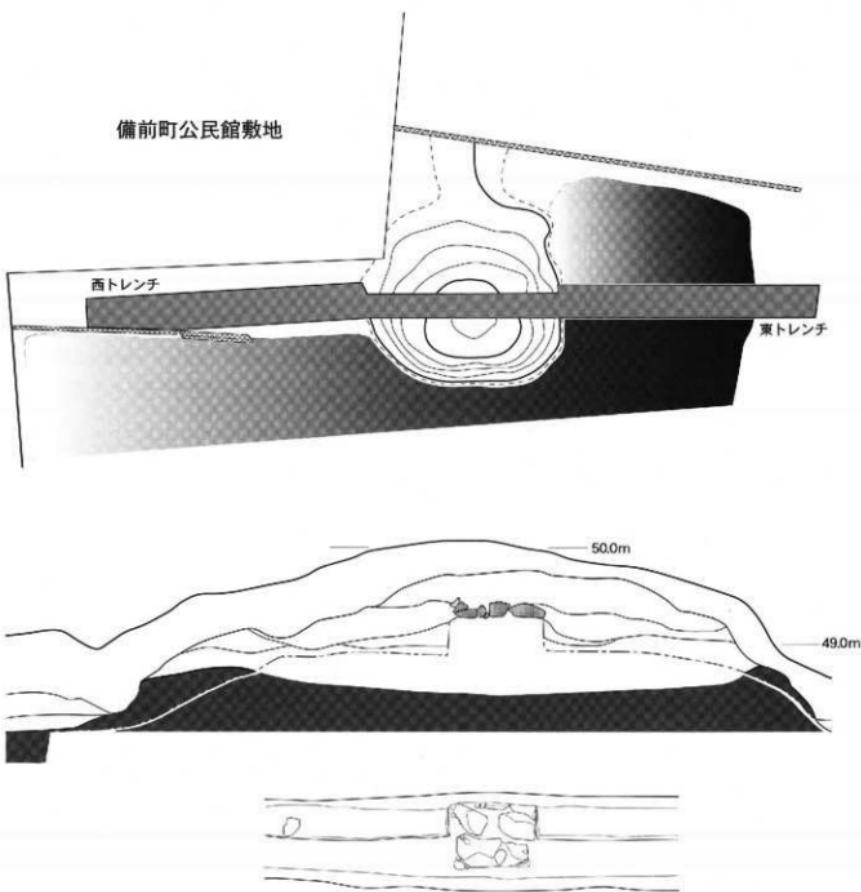


図2 調査区位置図 ($S = 1/200$) および丸山上層・平面図 ($S = 1/50$)

1. 東トレーンチ

池岸の現地表面下0.7mまでに池のヘドロ状堆積土が続き、これより下位では層厚0.5mの間で灰～暗灰色砂混じり粘質土・粘土の堆積が見られ近世上器片を包含していた。おそらくこの下面までが池の堆積層であったと思われる。さらに下層では暗灰色粘土と細砂が続いたがいずれも遺物はまったく含まれていなかった。従って、この地点においては環濠の存在は認められなかった。

2. 中央丸山トレンチ

現状で12mほどの高さの丸山中央を横断する調査区である。表土面下約0.5mで1mの高さに積まれた盛土により築かれた人工的な円丘であることを確認した。そして、この丸山のほぼ中央の位置では花崗岩と凝灰岩の石材による一辺約0.8mの方形石組遺構を検出している。円丘盛土の上面より表土層までには室町後半以降、盛土中には鎌倉期の土器片が含まれることから時期については概ね鎌倉期後半～室町期前半の範疇と考えられた。方形石組については、その構造から五輪塔などの石塔の台座部分になるものと思われ、この「丸山」の中央上部にかつて石塔が存在したことが推定される。

3. 西トレンチ

池内に設定した西トレンチでは、現状より1m下面までにヘドロ状堆積が続いたため層序確認を断念したが、西端の池堤付近では現地表面下約12mで池堤の盛土を、さらに下位の1.5mより下方で微砂混じりシルト・粘土の互層による河川状堆積を確認している。

III. まとめ

今回の調査では、当初の目的とする環濠の配置状況を確認することができなかつたが、「丸山」の円丘内部の調査により近接する天皇神社との関連が想起される新知見を得た。

その存在意義については、古代から中世の寺院に伴う浮島遺構と類似するものであり、構築から現状に至る経過では天皇神社の初現、前身となった神宮寺の存在が考えられ、その後に牛頭天王を祭る神社として再興される時期には「丸山」が機能的に廃絶している様子からも想定されよう。

9. ダンゴ塚古墳(第1次) - 豊田町

I. はじめに

天理市の中南部、奈良盆地の東山麓に所在する豊田町は、豊田山丘陵から流れる布留川流域の北部に位置している。発掘調査を行ったダンゴ塚古墳は、豊田町306番地に所在する耕作地で、周辺の田畠に比べて1.5mほど高い島状の地形になっており、一見して古墳であることが分かる。ダンゴ塚古墳の西側には宅地が隣接し、開発に伴って墳丘部が激しく削平を受けている。地元の方々の話によると、戦前までは墳丘の盛り土が高く残っていたようである。調査の契機は天理市都市計画道路の敷設に伴い、道路に關係する用地の一部が古墳に影響を及ぼすため、ダンゴ塚古墳の発掘調査を行ったものである。

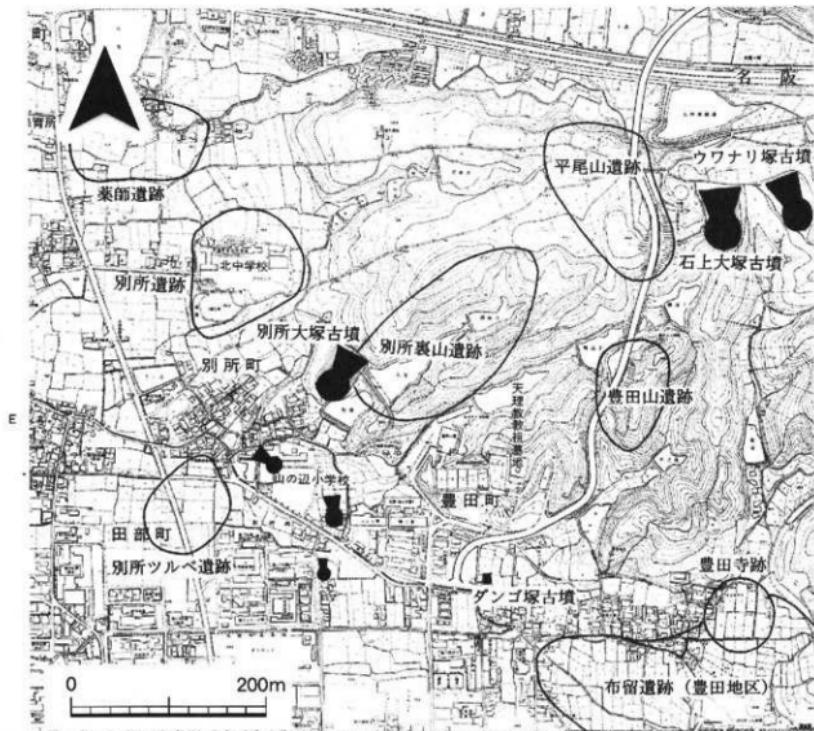


図1 ダンゴ塚古墳と周辺の遺跡 (S 1/10000)

標高120m～140mの豊田山丘陵は、白川池墨層を基盤とする高さ30m～50mの丘陵地で湧水が豊富なため、豊田山丘陵にある谷間にはため池を多数見る。このようなところでは多くの遺跡が展開し、豊田山遺跡や別所裏山遺跡など弥生時代後期から古墳時代初め頃にかけての集落遺跡や台状墓などが見つかっている。標高75m前後の地形上に立地するダンゴ塚古墳から北西500mのところには、大形前方後円墳の別所大塚古墳（後期古墳）があり、その周辺には別所籠子塚古墳や袋塚古墳など中規模の前方後円墳が集中している。また、高瀬川が流れる豊田山丘陵の北面には、大形前方後円墳のウワナリ塚古墳、石上大塚古墳があり、豊田山丘陵とその周辺には前方後円墳を中心とした古墳時代中期から後期にかけての古墳群が展開する。ダンゴ塚古墳の東方300mには、豊田寺跡が知られている。天理市北部の森本町、和爾町、櫻本町にかけては、創建時期が奈良時代に遡る寺院跡が散在している。豊田寺跡もそうした寺院遺跡のひとつと考えられるが、未調査であるため実態は不明である。

発掘調査は、平成10年度（平成11年1月11日～平成11年1月12日）に試掘調査を行い、平成11年度（平成11年5月24日～平成11年7月31日）に本調査を実施したものである。

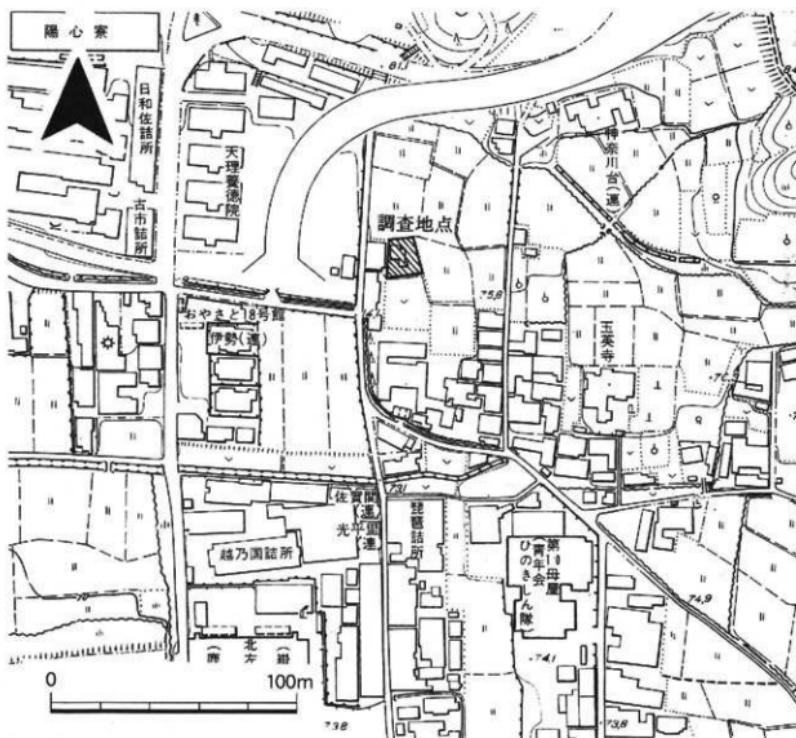


図2 ダンゴ塚古墳の位置 (S 1/2500)

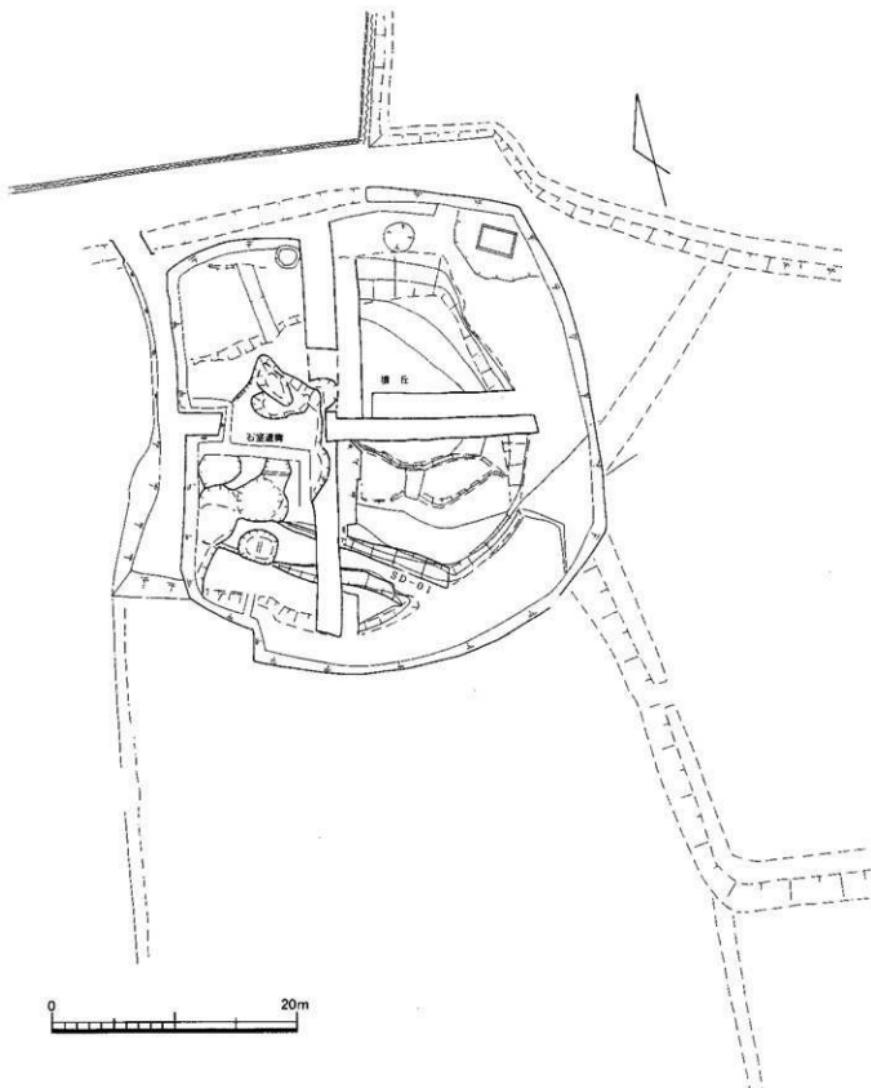


図3 ダンゴ塚古墳調査区平面図 (S 1/400)

II. 調査の概要

(1) 墳丘の調査

平成10年度に行ったダンゴ塚古墳の試掘調査は、墳丘の頂上部に長さ30m、幅1mの調査区を南北に設定し、ダンゴ塚が古墳かどうかを確かめた。その結果、古墳の盛り土部分を検出し、それとは土質が異なる部分も検出した。土質の異なりが埋葬施設の形跡を示すものかどうかは定かでなかったが、ダンゴ塚が古墳の残骸であることを確認したものである。また、墳丘の周囲にも試掘調査を行った。しかし、掘り割り遺構の形跡はなく、一辺32mの墳丘が残っているが、古墳の規模は定かでない。

平成11年度の本調査は、墳丘部分を中心に周囲1100m²まで調査区を拡大し、南北32m、東西32mの墳丘部分を中心に耕作土及び斜面表土まで掘り下げ、墳丘本体の盛り土部分の検出を試みた。その結果、墳丘の北部から東部にかけて土層断面には、築造に伴う盛り土を検出した(図4)。盛り土は、灰色土、黄灰色土、白灰色土等が細かく盛り付けられた地層をなし、墳丘を築造する際の版築の形跡と思われる。盛り土は1mほどが残っていた。一方、墳丘の西部から南部にかけては墳丘の搅乱が激しく、墳丘の盛り土はほとんど認められない状態で、基盤層である地山部分まで搅乱が及んでいた。検出した墳丘の盛り土及び地山部分は、南北30m、東西30mにわたって残存していたが、周濠の形跡は認められなかった。古墳には激しい搅乱の跡が見受けられ、ダンゴ塚の墳丘は現状よりもさらに規模が大きくなることが予測される。

(2) 埋葬施設の現状と古墳の時期

墳丘の西側にかけて検出した搅乱から、石室遺構の残骸を検出した(図3)。搅乱を受けた石室遺構には、径0.5m～1mの不定形な窪みがあり、窪みがコの字状に連なっていることから石室を壁面を構築した石材の抜き取り跡と思われる。石室の形態や規模は定かでないが、地山との関係から石室の奥行きが北東方向、石室の開口部が南西方向を向いた横穴式石室の跡と考える。墳丘の搅乱が西側から南側にかけて激しく、開口部から石材の盗掘を受けたものと思われる。搅乱層からは埴輪破片が数点、須恵器破片なども出土している。出土した埴輪片(図5)はいずれも小破

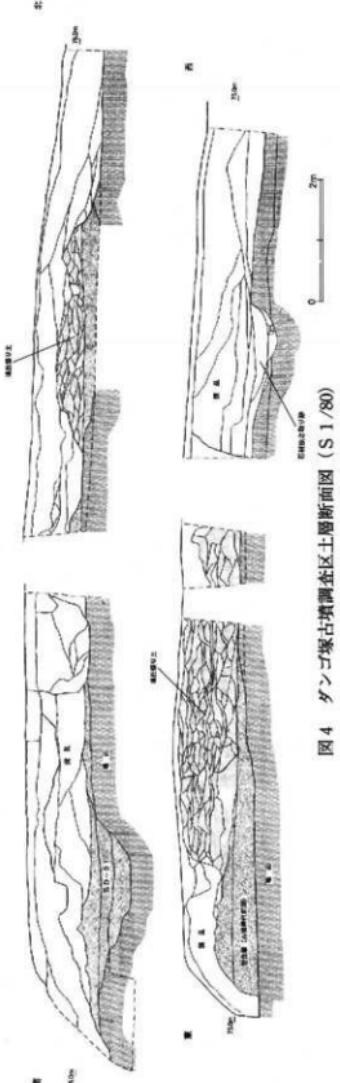


図4 ダンゴ塚古墳調査区土層断面図(S1/90)

片だが、いわゆる5期の円筒埴輪の破片で器面には明瞭なタテハケを施し、僅かに隆起したタガに幅広いヨコナデの跡を見る。色調は個体により変化するが淡黄色、灰黄色などが目立つ。これらがダンゴ塚古墳に伴う埴輪だとすれば、ダンゴ塚古墳が後期古墳であることを示す。また、出土した土器には須恵器破片も含まれる。形態的には、径19cmの窓口縁部（図6-8）と、径13.5cmの坏身須恵器底部（図6-7）などが含まれる。坏身の形態にはやや深みがありTK-23に類似するか、それよりやや新しい時期のものと考えられる。年代的には、5世紀後半～末頃（古墳時代後期）の資料だと思われる。

（3）下層遺構

ダンゴ塚古墳の直下には、古墳時代前期（布留期）の土器を伴う溝（SD-01）が出土している。遺構は、検出した幅で3m、検出面からの深さ60cm程の南東から北西方向に伸びる溝で、土器破片は少ないが古墳時代前期の土師器破片が出土している。また、溝の痕跡は古墳直下にのみ認められるが、古墳の周辺には痕跡を留めていない。

III.まとめ

調査の結果、ダンゴ塚古墳は、古墳時代後期に築造された横穴式石室を伴う古墳の跡である。墳丘の規模も現状よりさらに拡大する古墳と思われる。墳形は、円墳なのか前方後円墳なのか、今回の調査では判断できない。石室はすでに擾乱を受け、石材も全く残っていない。石材の抜き取り穴の状況から、南西から北東方向に石室の主軸をもち、南西に石室の開口部をもつ古墳だと推測する。この他、天理市豊田町に広がる豊田山丘陵の南側山麓には、ダンゴ塚と同様に墳丘を失った古墳がさらに存在するものと考える。また、古墳の下部から古墳時代前期の溝を伴う下層遺構が見つかった。遺構や遺跡の性格は不明だが、時期的に布留遺跡の展開と併行する遺構であることから、ダンゴ塚古墳が立地する周辺にも布留遺跡の範囲が及ぶのかもしれない。

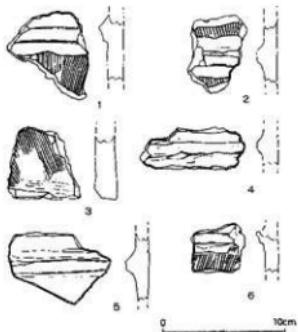


図5 ダンゴ塚古墳出土の埴輪（S 1/4）

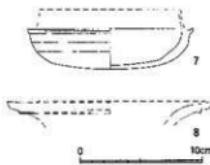


図6 ダンゴ塚古墳出土の須恵器（S 1/4）

平成12年度
(2000)

10. ダンゴ塚古墳(第2次) - 豊田町

I. はじめに

ダンゴ塚古墳における今回の調査は、前年度に引き続き都市計画道路建設に伴う事前調査として実施した。調査にあたっては、道路計画路線上に南北幅6m、東西長12mの長方形の調査区を設定し、路線内における遺構、遺物包含層の有無および当該古墳の範囲確認を目的として進めることになった。現地調査は平成12年7月24日より開始し、8月22日に終了した。総調査面積は72m²であった。

II. 調査の概要

1. 層序と遺構

調査では、調査区の現地表面下約0.5~0.7mで中世以降の遺物包含層、遺構面を確認したためこの面での調査を主体として進めた。その際の検出遺構には、土坑、小穴群等の9基が確認された。この面より下位では現地表下13~17mで基盤層となる灰黄~明褐色砂礫土・粘土層が南側に傾斜をもって下降するが、この間には土器や須恵器など概ね古墳時代後期の土器小片を含む黄~黄褐色のブロック混じり

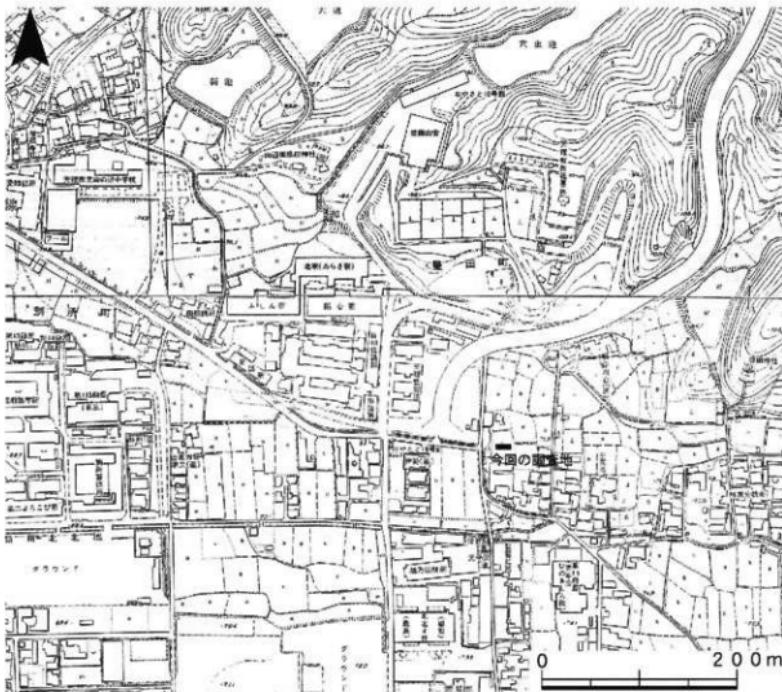


図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

土が介在していた。そのため上部遺構面についての面的な調査の後に最終的に先述の基盤層を全面的に確認するまで掘削をすすめた。

上部遺構面検出遺構では、ほぼ中世後期の遺構が主体となり、出土遺物のほとんどは中世の雜器類であるが、図示したように古墳後期の須恵器片などが混入する。特筆すべき遺構としては長辺3.5m、短辺2mの規模で深さ60cm前後の長方形プランの土坑状の遺構がある。この土坑の底面基盤層上には円形の浅い掘り込みが残り、周囲には螺旋を配するような状況で検出されている。また土坑北側長辺には北方上方に向かって一部突出する部分が認められることから、土坑に向かっての傾斜により雨水などを貯留する「溜め井状遺構」として推定されよう。

なお、今回の調査とは別の契機であったが、調査区東側付近の下水道工事の際にも同様な中世遺構面と下位の基盤層までの状況を確認しており、基盤層上の堆積土から土師器高杯の破片が出土している。

以上のように、この付近ではダンゴ塚古墳に伴う周濠相当の遺構や墳裾を示す状況は確認されなかった。その要因として中世後期遺構面のベース面形成時点までの地形の変化が考えられるが明確な破壊、改変に至る時期幅等は不明である。

2. 出土遺物

前項で記したように、調査では中世後期の土器類が主体となって出土しており、総数ではコンテナ3箱程度の量におよぶ。ここではその内容について簡単に提示し、図示したものの時間幅のみを示すも

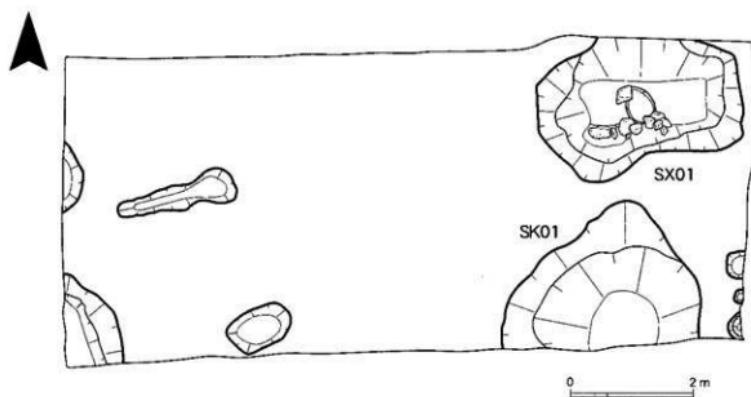
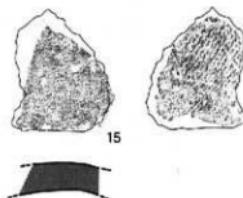
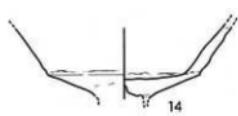
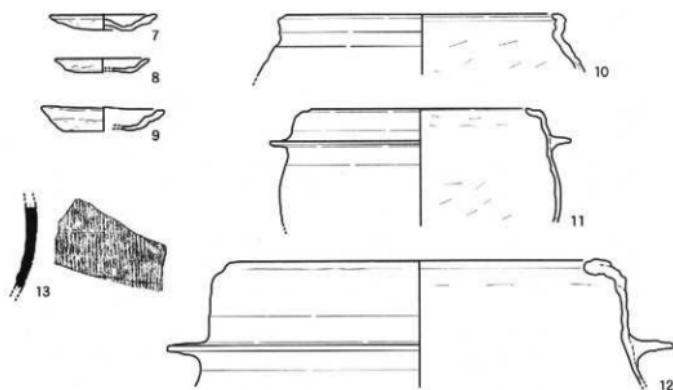


図2 調査区平面図 (S = 1/80)



0 10cm

図3 出土遺物 (S = 1/4)

のとしたい。

1～14は調査区北東の溜め井戸状遺構出土土器である。埋没時期は1～3の中世土器で知れるが、埋土中には4・5の須恵器器台片や6の平瓦片など古墳後期から奈良時代頃までの遺物の混入が見られた。7～12は調査区東南の土坑より出土している。溜め井戸状遺構と同様に主体となるのは中世土器片であるが、ここでも古墳後期の須恵器片が混入する。両遺構ともに機能、廃絶した時期は近いものと思われる。なお、14の土師器高杯、15の瓦片は調査区西側の下水道工事立会時に出土したものである。前記の混入須恵器よりは若干時期は遅るものである。これらの遺物からはダンゴ塚古墳の前後の時期のものが目立つ状況を呈する。

III.まとめ

今回の調査では、当初の目的としたダンゴ塚古墳周辺遺構についてはまったく確認することができなかった。中世前後の開発行為により丘陵縄から平坦地までの地形を大幅に改変していった状況のみが確認されたに留まったが、同様に周辺においても現状地形からの判断のみで古墳等の構築遺構を容易に理解することができない点を痛感した調査であった。

今後は、こうした視点からも留意しつつ調査に挑まなければならないであろう。

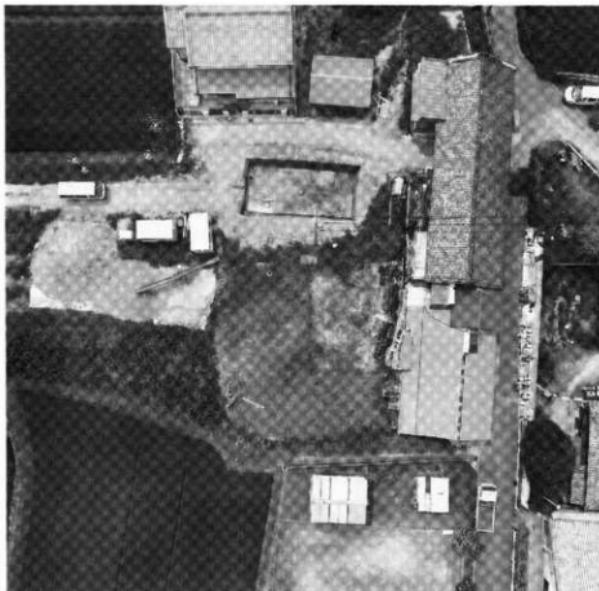


写真1 調査地周辺（上空から・下が北）

11. 柳本藩邸遺跡(第8次) - 柳本町

I. はじめに

今回の調査は、柳本藩邸の南西隅に近接する寺院である専行院の本堂建替え工事に際して実施した発掘調査である。専行院は柳本藩主の織田家代々の菩提寺であり、大枠では柳本藩邸遺跡の範囲内に含まれる。現地における調査では、本堂中央の基礎杭間に南北幅4m、東西長さ10mの調査区を設定し、遺構、遺物包含層の検出に努めた。調査は平成12年9月25日より開始し10月2日に終了した。総調査面積は40m²であった。

II. 調査の概要

1. 層序

現状地盤では、すでに建築物（建替え前の本堂）下部や寺院創建時遺構の整地土が表出しており、そ



図1 調査地点位置図 (S = 1/5000)

の直下の現地表下0.4m前後で黄褐色の砂質土、砂礫土による基盤層が検出された。今回の調査ではほとんどの遺構をこの地山（基盤層）上面で検出している。そのため大半の遺構は寺院創建時の整地により削平された状態での検出状況となっている。

2. 検出遺構

調査区の西半寄りに土坑3基、溝1基、小穴14基を検出している。

検出遺構のうち、溝SD01および小穴群のほとんどについては専行院創建以前の中世後期頃のもので根石をもつものも見られた。建物等の方向性については不明瞭であるが、当地域における在地土豪等の屋敷地が寺院の前身となっていたことも推測されよう。

その他の土坑については土器片等の出土遺物から概ね弥生後期末～古墳前期初頭の帰属が考えられる。出土遺物では小片が主体となるが、土坑SK01では底面付近で国示した手堀り形土器が出土している。

3. 出土遺物

調査地周辺および調査区内の整地土層、遺構埋土より古墳出現前後期（弥生後期末～古墳前期初頭）、中世後期～近世の土器片が多く採集、出土している。

1～10は専行院境内地において表面採集した中・近世土器類である。1～3、9・10は土師質皿である。中世後期～近世のものが混在する。4～7は近世の施釉陶器類である。8は瓦質すり鉢である。中世末～近世初頭のものである。

11～15は調査区西半の遺構群上面精査時に出土した土器類である。11は土師質小皿、12は瓦質すり鉢の底部片である。13～15は弥生後期末～古墳前期の土器類である。器種ごとの特徴からおそらく庄内式期後半～布留式初頭の範疇のものであり、下面の土坑等の遺構の時期と整合する。

16は土坑SK01出土の手堀り形土器である。覆い（ドーム形）部分を欠く鉢の形態のみ知れるものであるが、文様は施されず素文で新しい要素の見られる土器である。

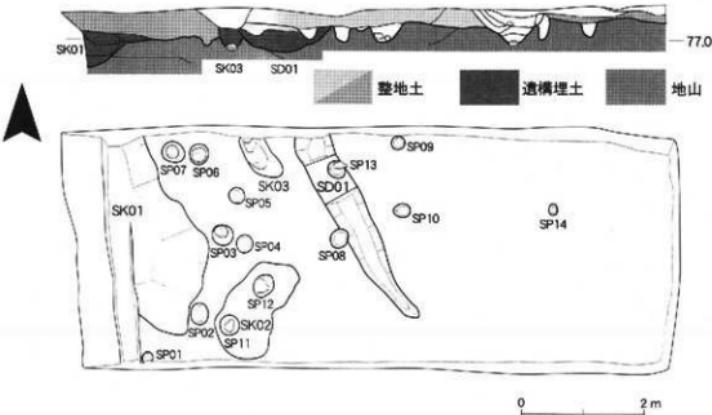


図2 調査区平面図 (S = 1/80)

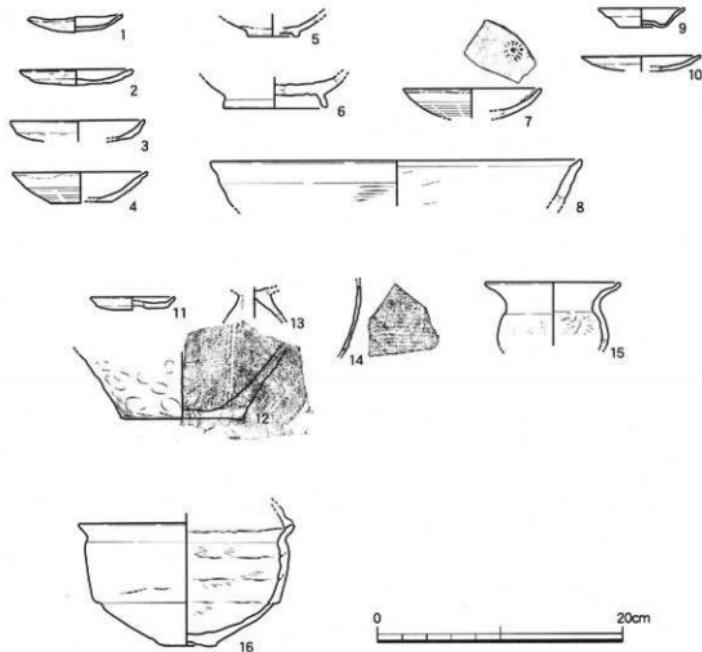


図3 出土遺物 (S = 1/4)

III. まとめ

今回の調査では、柳本藩邸遺跡と密接な関わりをもつ専行院の創建以前の状況を少なからず知ることができた。整地土より下位で検出された遺構群からは前身となる建物群の存在が想定されるが、今後も検証は必要である。古墳出現前後期の遺構、遺物については周辺に展開する大和・柳本古墳群の基盤集落の一端となるものであろう。

柳本藩邸遺跡内では個人住宅等の小規模開発が今後も予想されるため、なおもこうした時期の遺構群の拡がりを検証せねばなるまい。

12. 西山古墳 - 榆之内町 勾田町

I. はじめに

(1) 調査の契機

天理市の中央部、袖之内町から勾田町にかけて所在する西山古墳は、大形の前方後方墳として知られている。今日では西山古墳と呼んでいるが、かつてはナガリヤマとも呼ばれ、昭和2年に国史跡指定を受けた際に古墳名を西山古墳と定めている。山麓から伸びる標高70mから80mの低い尾根筋と谷筋によって形成された起伏のある緩傾斜地にあって、尾根筋地形上に墳丘を築造している。西山古墳の周辺には大形古墳が点在し、西山古墳の北側に隣接して墳径約60m、中央部には埋葬施設を伴い、天井石は抜き取られているが巨石を用いた横穴式石室を留める塚穴山古墳がある。また、西山古墳から北方100mの地点には、すでに墳丘のない前方後円墳、小半坊塚古墳の所在が推定されている。この他、遺跡地図には西山古墳の周辺に墳丘を失った古墳の跡が多数印されている。

西山古墳は、墳丘に樹木がなく笠で覆われている。草刈が行われる1月から3月には、西方に伸びる前方部など墳形を詳細に見ることができる。周囲の地形には掘り割りの痕跡を留めるが、前方部の西側

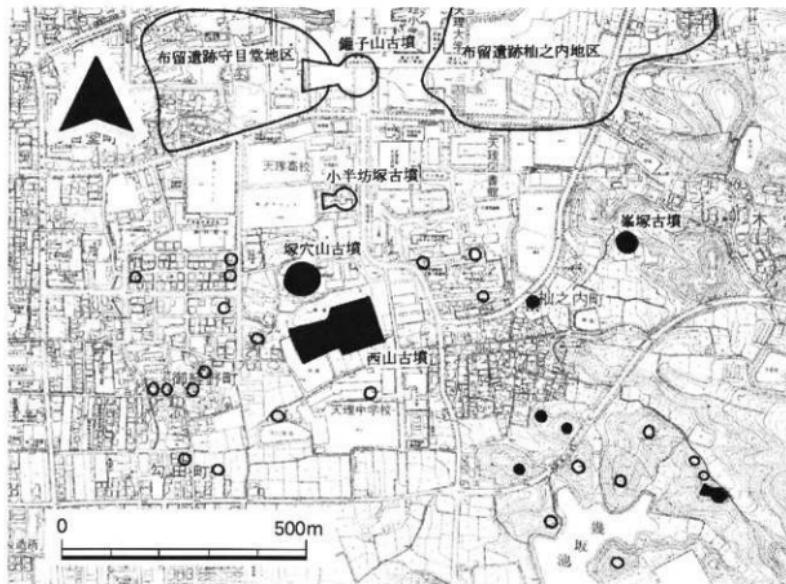
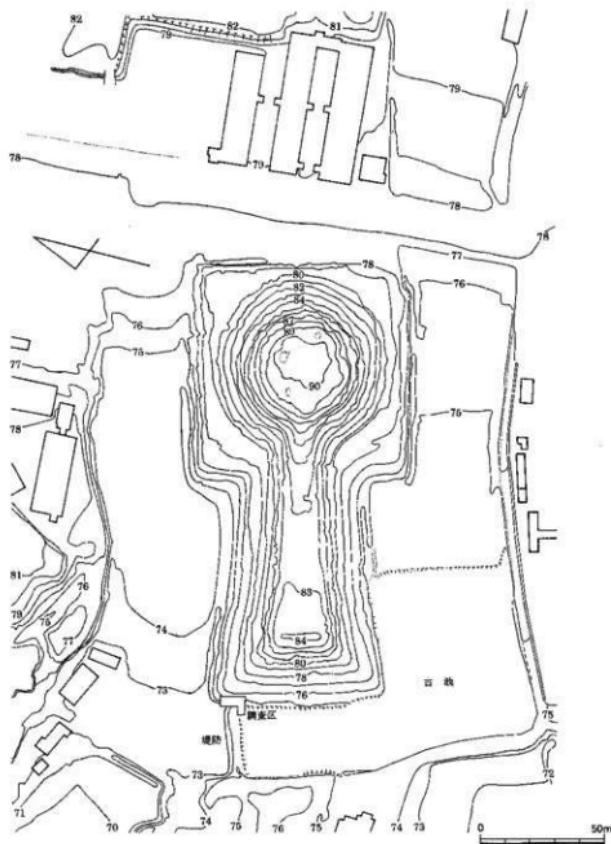


図1 西山古墳と周辺の遺跡（S 1/10000）

から西方にかけて古池と呼ぶ溜池がある。この溜池は、前方部正面やや北よりの地点に堤防を築いている。前方部西方の古墳外に通じる渡り堤にもなっている。この堤に築かれていた水門付近から漏水が発生し、溜池を管理する地元の方々から補修工事の要望が天理市に寄せられたため、工事に先行して漏水部分の発掘調査を行い堤防の保全と古墳の保護を計ったものである。調査に際しては、奈良県教育委員会文化財保存課と協議しながら文化財調査を検討し、補修工事にかかる工法が墳丘には影響を及ぼさないよう指導を計った。特に古池に面した前方部掘の水際には、1mほどの浸食が認められ、堤防の漏水が古墳と堤防との付け根にあたる部分で発生している可能性があった。よって、堤防と古墳との付け根付近に調査区を設定し、漏水が墳丘部分にまで浸透しているかどうか確認したものである。



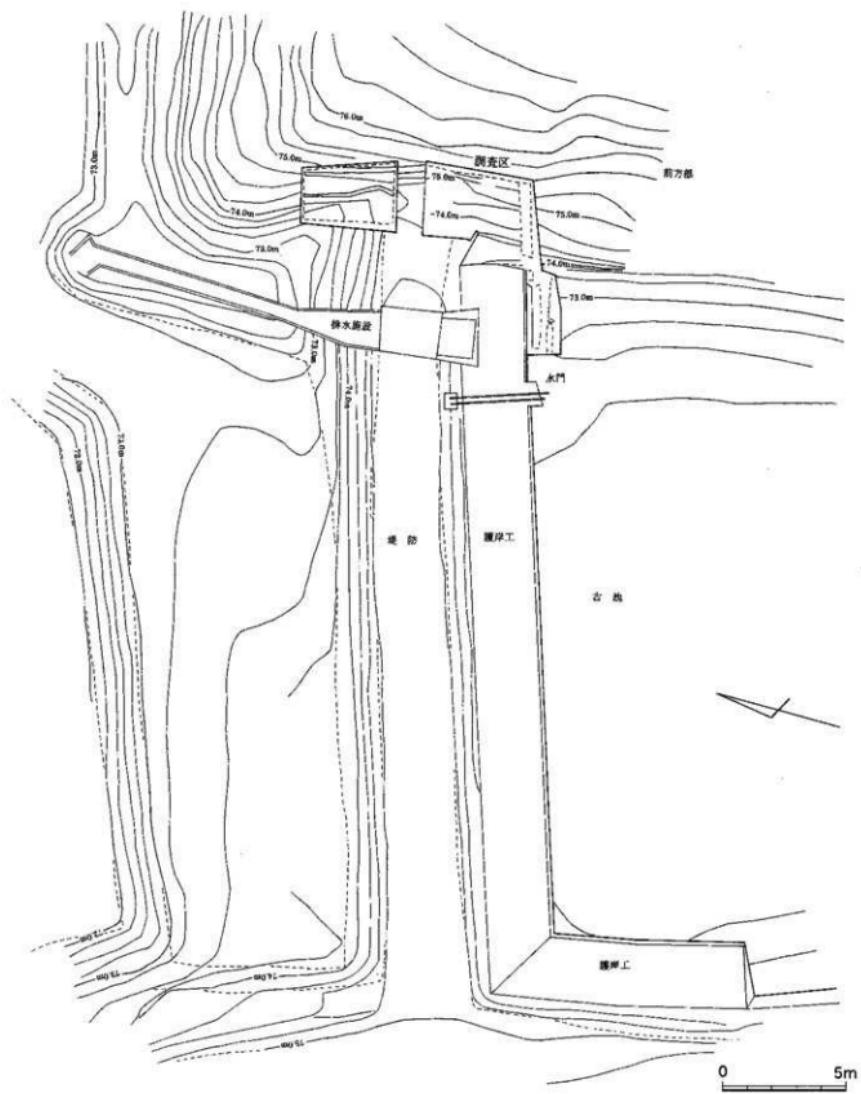


図3 古池堤防と調査区位置図 (S 1/200)

(2) 西山古墳の概観

西山古墳は、地形に沿う形で東西に主軸をもつ全長180mの規模をもつ大形古墳である。墳丘は、一般的に前方後方墳として考えられ、3段築成との指摘もあるが現状から上下2段築成のように見える。測量図による観察から下段が全長180mの前方後方形、上段は全長160mの前方後円形に築いている。つまり、前方後円形と前方後方形を上下2段に重ね合わせて築いた特異な墳形を持つ古墳と思われる。太平洋戦争中には、高射砲を据えるため墳丘を掘り返したと伝えられている。その時のものかどうか定かではないが、後円部頂上には窪みがあり竪穴式石室の存在が指摘されている。また、波文帯神獸鏡と考えられる鏡片、管玉、鉄劍の破片、車輪石などの出土品が知られている。なお、主体部である埋葬施設の位置は、現地踏査や測量図による観察から上段築成の後円部に求められる。主体部を構成する墳丘部分をその主たる墳形だとすれば、西山古墳は前方後円形を主墳とし、下段にあたる前方後方形の墳丘は、前方後円墳の台座や基壇のように思える。

II. 調査の概要

(1) 前方部先端の遺構

調査区は、前方部正面と古池の堤防の付け根部分に設定し、南北10m、東西3m、およそ30mに渡って発掘を行った。水際の侵食が堤防の付け根部分と墳丘まで及び漏水が起きているかどうかを確認するものだが、堤防の南面を構築しているコンクリート護岸工についても基礎部分で漏水が起きているかどうかを確認した。

調査では、堤防の基礎工事の跡を掘削し、調査区南壁の断面から墳丘裾を築いた葺石の形跡を検出した(図4)。葺石は、墳丘の先端からさらに3mほど古池側に位置し、拳大の石材を用いて石敷きを施し、基底部には人頭大の石材を使って先端を区画している。葺石は、緩やかな傾斜で墳丘側に伸び水際部分まで認められるが、さらに墳丘側の葺石は検出していない。断面図で見ると墳丘裾に落ち込んだ転落石のように見えるが、地山や墳丘盛り土の直上に石材が施されていること、腐葉土の形成が石材の上部にあり2次堆積層よりも明らかに石材の方が古いこと、石材を施した先端には大振りの石材があり前方部先端を区画している点などから前方部の裾廻りを区画した葺石の跡と考えている。なお、検出した葺石から古墳本体に連なっていく葺石や基底部の形跡を見ていない。土層観察では、淡赤黄色土(図4-5)の直下に明黄褐色砂礫質土(図4-7)があり、この地層が地山であることから葺石の連なりが地山に沿って墳丘側に連なっている状態が想定される。淡赤黄色土(図4-5)や暗灰色粘土(図4-4)は、2次堆積層と考えられる。

ところで、西山古墳は埴輪が伴うことが知られていたが、今回の調査では葺石遺構に伴う埴輪などの遺物は検出していない。堤防との付け根部分から近世や近代の茶碗などが出土している。前方部南西側コーナー付近や南側の古池に面した水際には、古墳時代前期の円筒埴輪片などが散在し、西山古墳には埴輪列の存在が推測される。

(2) 堤防の構築

古池の堤防は、その基盤に鋼土を染き、前方部先端に食い込ませて古墳と堤防を取り付けている。このため、堤防の構築に際しては、前方部の一部を掘削していた。また、堤防の南側に施されたコンクリート基礎とブロックによる保護工は、構築工事の際に前方部先端の葺石遺構を掘削し堤防工事が行われ

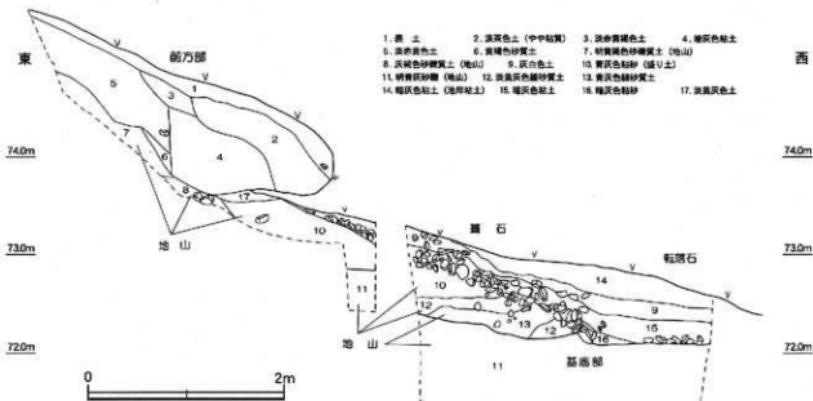


図4 調査区南壁土層図 ($S = 1/50$)

ていたようだ。堤防が構築されたのは、近世や近代の茶碗などが出土しており、江戸時代または明治時代の頃と考える。

III.まとめ

西山古墳の掘り割りにあたる古池の堤防に発生した漏水の状態を確認するために、堤防と前方部の付け根部分の調査を行った。その結果、前方部先端を区画した葺石を検出し、墳丘から3mほど外側に前方部先端を区画する葺石基底部を確認した。しかし、前方部裾の葺石には埴輪列は認められなかった。ただ、ため池の周辺から円筒埴輪の破片が散在しているなど、墳丘の埴築面には埴輪列が伴うようだ。

調査の目的であった漏水は、古墳への影響が懸念されたが、幸いにも堤防の付け根部分において漏水の形跡がなく、直接工事が古墳まで及ばない計画となった。ただ、墳丘と堤防との付け根付近は、保全工事として護岸工を施している。

13. 平等坊・岩室遺跡(第20次)－岩室町

I. はじめに

天理市の中央部、平等坊町から岩室町にかけて所在する平等坊・岩室遺跡は、弥生時代の環濠集落として知られている。遺跡の存続期間が長く、弥生時代前期から後期、さらに古墳時代にかけて生活遺構が展開する。とりわけ弥生時代にかけて多重の環濠を集落の周囲に巡らし、集落の外側には自然河川が流れるなど、研究では遺跡の景観復元が進められている。

平成11年度6月末に奈良県地方において集中豪雨があり、天理市でも激しい雨となった。そのため、天理市岩室町のヒライ池西堤において、堤の外側の斜面に土砂崩れが起き、天理市農林課が災害復旧事業として堤の補修を実施することになった。この調査は、復旧事業に際して事前に埋蔵文化財調査を行ったものである。なお、復旧を実施した地点は2ヶ所あり、それぞれ第1・2調査区を設定した(図2)。

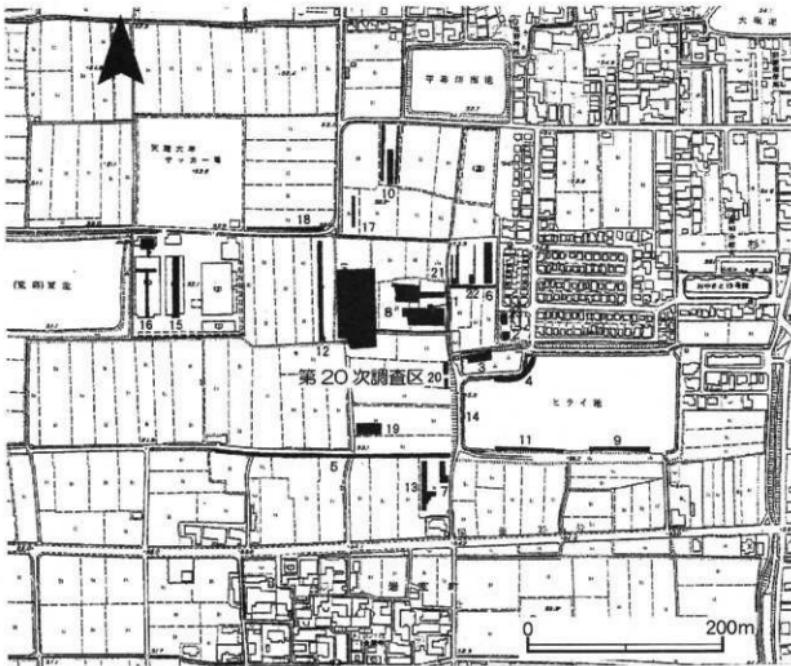


図1 平等坊・岩室遺跡調査地点位置図 (S 1/5000)



図2 第20次調査地点位置図 (S 1/400)

図3 第2調査区平面図 (S 1/200)

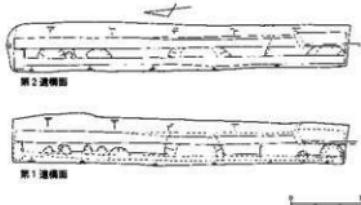


図4 第1調査区平面図 (S 1/200)

II. 発掘調査について

a) 第1調査区

堤の中央部付近において幅12m、長さ13.5mにわたって設定した調査区である。耕作土より30cmほど下位には、黒褐色土の遺物包含層が、その直下には遺構の基盤層である青灰色細砂層などがあり、良好な微高地と生活遺構が認められる。検出した遺構は、土坑5基、ピット6基で、弥生時代前期から中期にかけての遺構である。

b) 第2調査区

堤の北より付近において幅12m、長さ9mにわたって設定した調査区である。基本層位は、第1調査区と同じである。調査区の南端から弥生時代後期の土坑を検出し、多数の土器破片が出土している。また複数のピットも検出している。

III. まとめ

調査の結果、耕作土の直下、およそ30cm下位から遺構を検出するなど、ヒライ池堤防直下の包含層や遺構面は残りが良好であった。出土した遺構は、集落内部の居住域であるため、住居遺構に関わるものと考える。

図

版



調査作業風景（西から）



遺構検出状況（南西から）



調査区 完掘状況（南西から）

図版2 長岳寺
旧境内地遺跡(1)



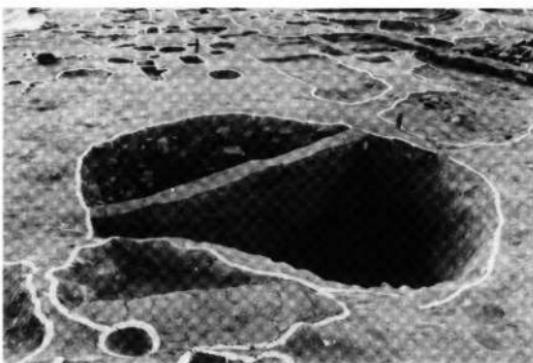
遺構検出状況（南から）



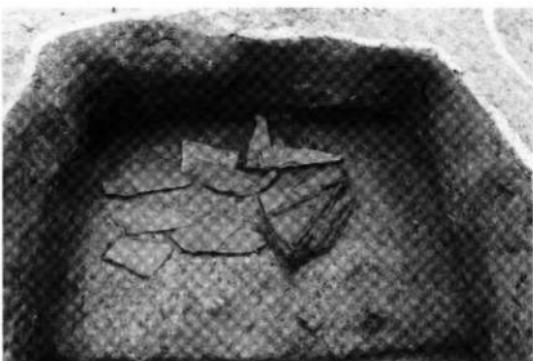
遺構検出状況（南西から）



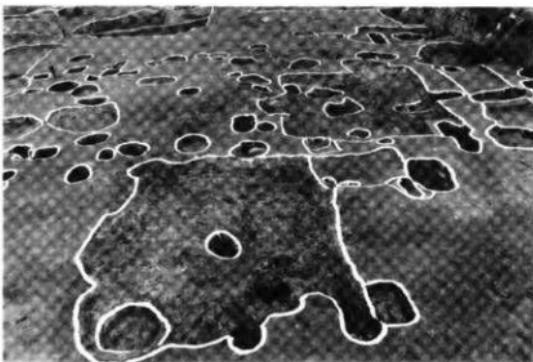
遺構検出状況（東から）



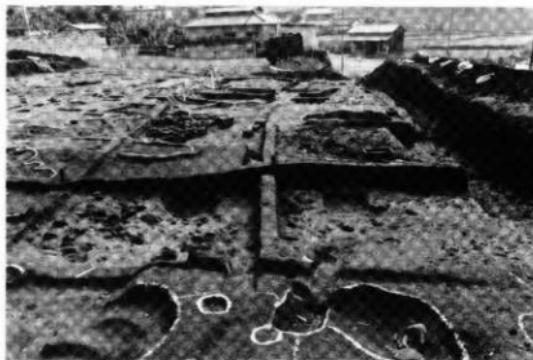
円形土杭 (北から)



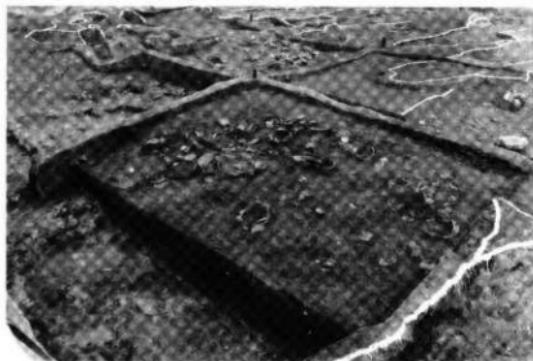
鍛冶炉跡 (北から)



工房跡 (南から)



大型土杭内部の炉跡
(北から)



大型土杭内遺物出土状況
(北西から)



大型土杭内の堆積層序
(北東から)

図版 5 長岳寺 旧境内地遺跡(4)



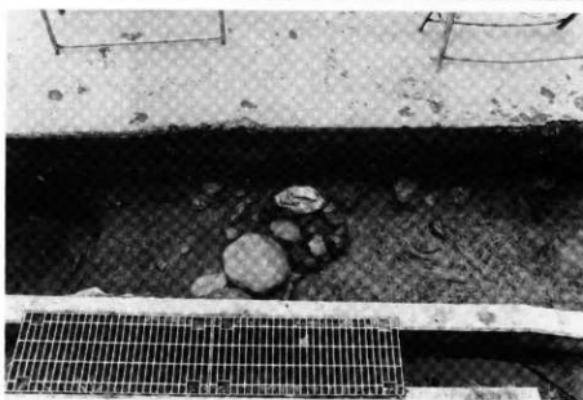
調査地遠景（西から）



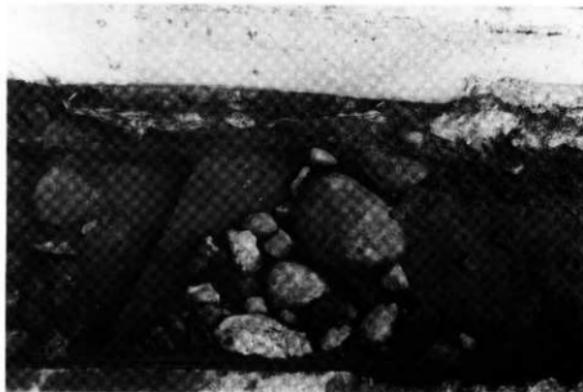
調査区全景
(上空から・上が南)



墳丘西端前面の
事前調査区（西から）



第1トレンチ遺構検出状況
(真上から・下が北)



第1トレンチ遺構検出状況
(真上から・下が北)